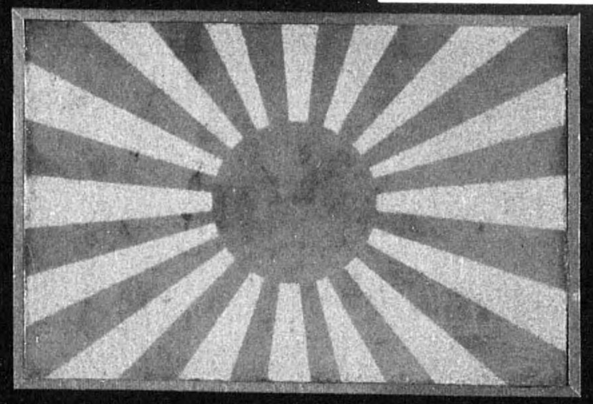
279.5-143
1200501360877
795
43



支那事變
上海方面

皇軍慰問記念帖

大日本少年團聯盟
上海方面皇軍慰問團

始

支那事變
上海方面

皇軍慰問記念帖

2795
143

支那事變上海方面皇軍慰問團
記念帳刊行に際して

去歳師走二十九日我大日本少年團聯盟を代表し、健兒二十七名を引率して長崎港を出發し戰塵尙ほ未だ其の餘粉を止むる上海に航行、該地附近の皇軍を慰問し、且つ戰跡を見學して玆に其の使命を果すと共に、多大の敎訓を得て、一月八日無恙歸團せり。當時の狀態と感激とを永久に記念する爲め健兒並に關係者の撮影せし寫眞を蒐集し、且つ健兒の所感文を收錄して、玆に記念帳を作製し派遣團員及同志に頒布すと云爾。

昭和十三年三月

大日本少年團聯盟
上海方面皇軍慰問團長　酒井幾造

目次

寫眞……(1)

感想……(21)

皇軍慰問の旅を終へて……酒井幾造…(21)
所感……田村喜一郎…(25)
上海に皇軍を慰問して……若宮正…(26)
上海皇軍慰問團に參加して……小西金之助…(26)
心よりの感謝……伊藤秀光…(28)
空爆の威力……高柳正介…(28)
必らず勝たねばならぬ……林與壽郎…(30)
○○飛行場訪問記……川村次郎…(30)
光榮！感激！……田村稔…(32)
世界一の幸福……島田太郎…(33)
感激に戰く……井辻憲一…(33)
自分の特に感じたこと……山下健…(35)
日本魂のあらはれ……奥出重吉…(36)
尊き犧牲……今西福藏…(36)
感激の皇軍慰問行……金光國勢…(38)
慰問の喜び……須唐晴男…(39)
一月三日……中野馨…(39)
日本に生れた喜び……國分正二…(40)
戰はこれからだ……日暮瑞穗…(41)
光榮と健兒の覺悟……道田信一郎…(42)
日本萬歲！……加藤兼雄…(42)
日本人の誇りと喜び……三島謹子…(43)
私の感想……岡本千枝子…(45)
一杯の水……松尾房子…(46)
永久の記念に……成川三保子…(47)

慰問團員署名集……(20)
慰問團名簿……(47)

支那事變
上海方面 皇軍を慰問して

上海方面皇軍慰問團

寫眞撮映

若宮正
小西金之助
川村次郎
林與壽郎
田村稔
古澤啓三
日暮瑞穗

上海日本人中部少年團

高瀨清人氏

陸軍上海方面派遣軍最高指揮官松井岩根大將に
慰問の辭をのべる派遣團員

慰問について

高瀬 術人 氏
日本人中堅必勝團
日置 章 團長
古賀 三郎 顧問
田村 章 顧問
林 興 顧問
川村 大 顧問
西 金 次 顧問
吉 賞 顧問
上海式國際軍事顧問

慰問團の事情

上海方面軍事部文

軍艦出雲にて長谷川支那方面艦隊司令長官を中心としての記念撮影
中央、長谷川司令長官。向つて右となり、杉山參謀長。
左上は岡出雲艦長。他は派遣團員と上海日本人少年團幹部。

茲慰征旅

昭和十三年一月
上海皇軍慰問團長
陸軍少將　酒井幾造

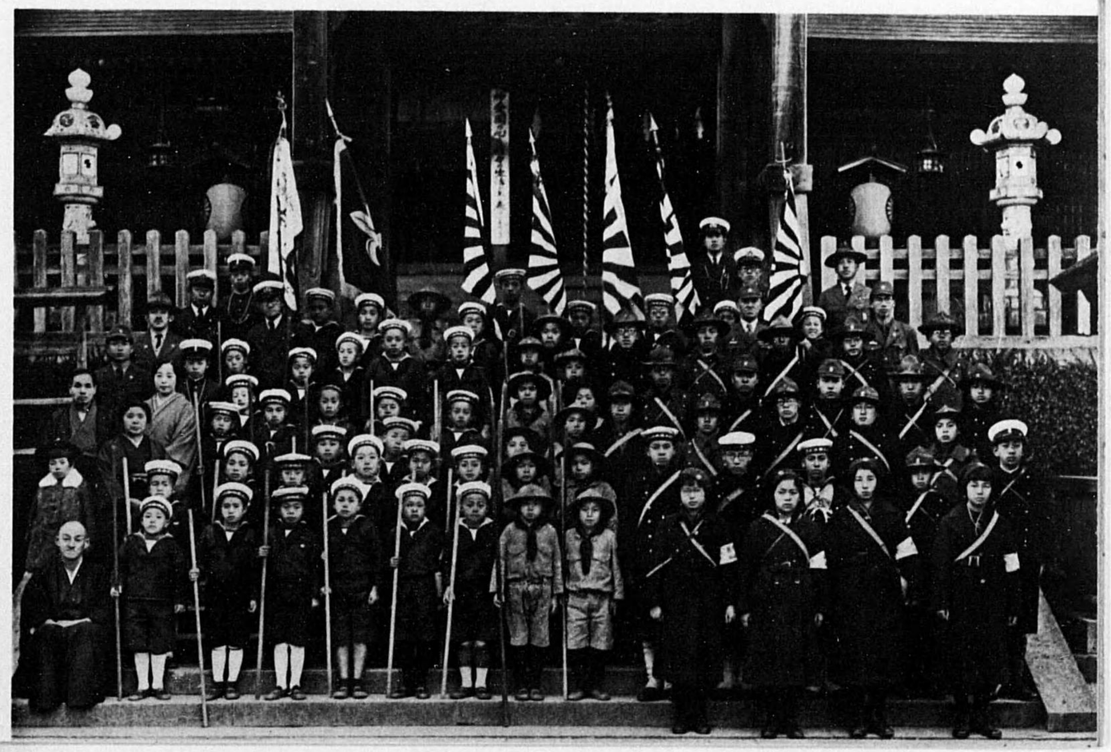
（酒井團長筆）

附團
若宮正

大日本少年團聯盟
上海方面皇軍慰問團團長
酒井幾造

隊長
田村喜一郎

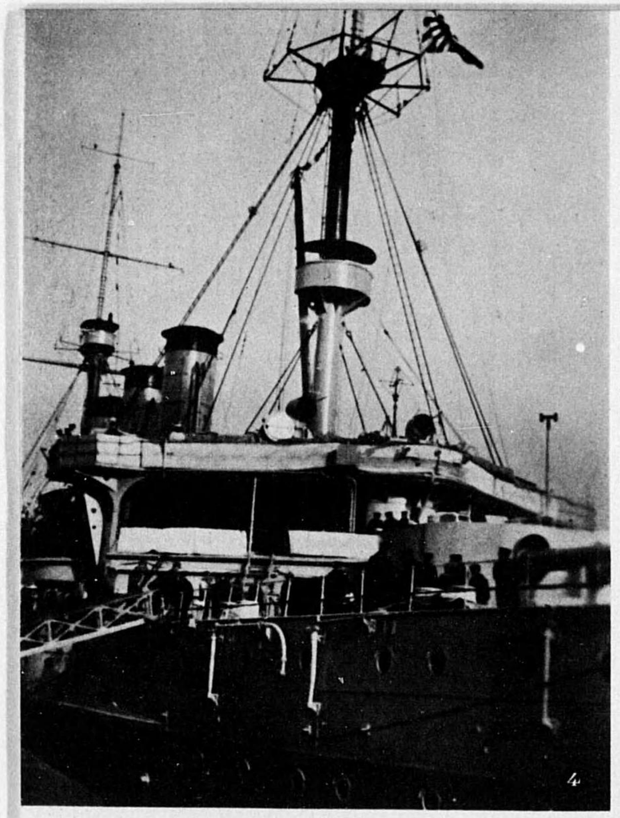
（下）長崎諏訪神社にて長崎少年團代表と共に皇威宣揚、皇軍武運長久を祈願し、派遣團結團式を行ふ（長崎要塞司令部檢閲濟）



① 長崎より長崎丸にのつて、海上二路上海に船はすゝむ。

② 十二月三十日揚子江から黄浦江に遡つてゆくと小舟にも日の丸が、はためいて、江上に我が飛行艇の浮ぶを見る。吳淞砲臺を右にみて、兩岸に激戰の跡が偲ばれる。

③ もう、上海だ！　兩岸にたちならぶ大建築物を見て、大上海の盛を思ふ。

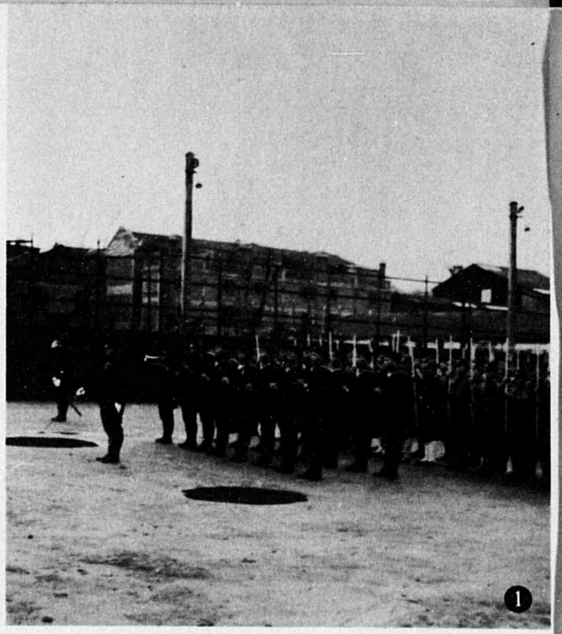


④ 上陸第一歩は日本郵船棧橋に印せられ、在りし日の繁華も砲火にあの跡をとゞめるブロードウエイをとほり、軍艦出雲に……

⑤ 力強い長谷川司令長官のお言葉に、思はず拳をにぎる。

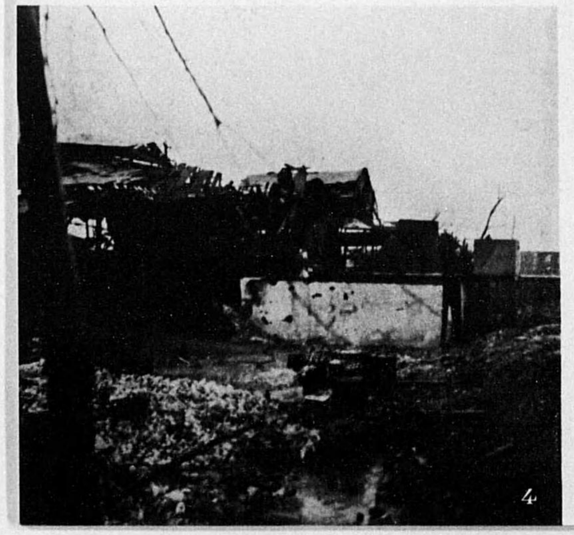
⑥ 來艦の旨を副官につげる酒井團長。黄浦江上、ひらめく軍艦旗を仰ぎ見る時、海國男子の胸は高鳴る。

①一月一日！
戰勝の春を、上海に迎へた我ら一行は、陸戰隊の御好意により、朝の式に參列することができた。
なんといふ莊嚴な式であらう。
昇る太陽を仰いで、
天皇陛下の萬歲を心より唱へ奉つた。

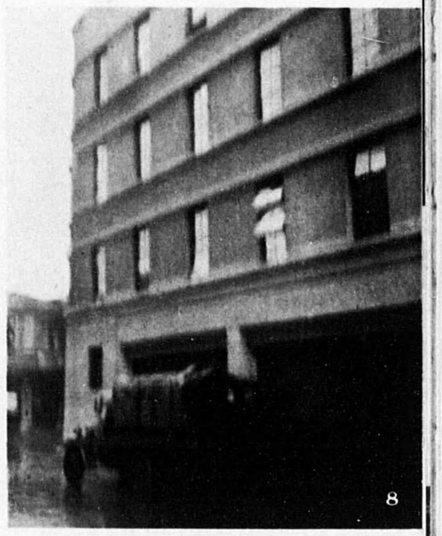


②閘北、北站の見學にでかける。
町の辻々に立つて、いかめしい守備の兵隊さんも、我らの敬禮には、ほゝえみながら答禮して下さる。

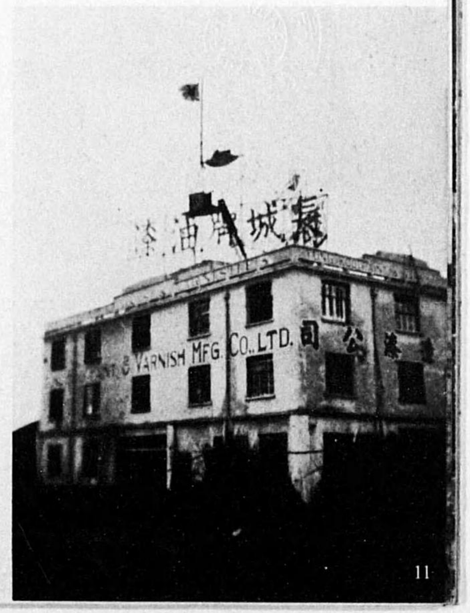
③燒けのこのた建物。
中華民國童子軍指導者集會所といふ看板がでゝゐる。
④我が勇士の壯烈なる戰ひのあとが至る所にしのばれる。



十二月三十一日、氷雨ふりしきる中を上海神社に詣で
⑦上海特別陸戰隊本部に至り、大河內司令官に御慰問の辭を申上げる。
⑧敵の砲煙彈雨の的となつた陸戰隊本部の毅然たる偉容には皇軍の御奮鬪に只々感謝の涙がこぼれた。
海軍病院を御見舞してから日本人墓地、十字橋、廣中路に出で、貴志中尉の戰死の墓前にぬかづき、クリークをわたり楊柳の中をとほつて、
⑨⑩愛國女塾に出る、學校の內の地下室の堅固な陣地に驚き、

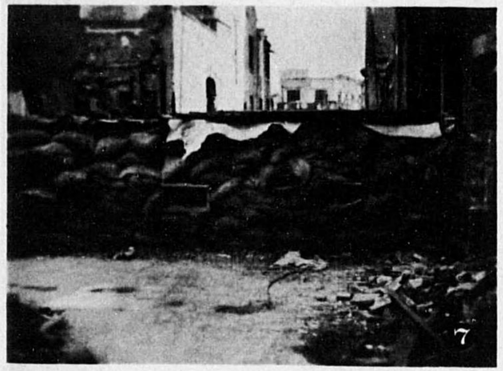


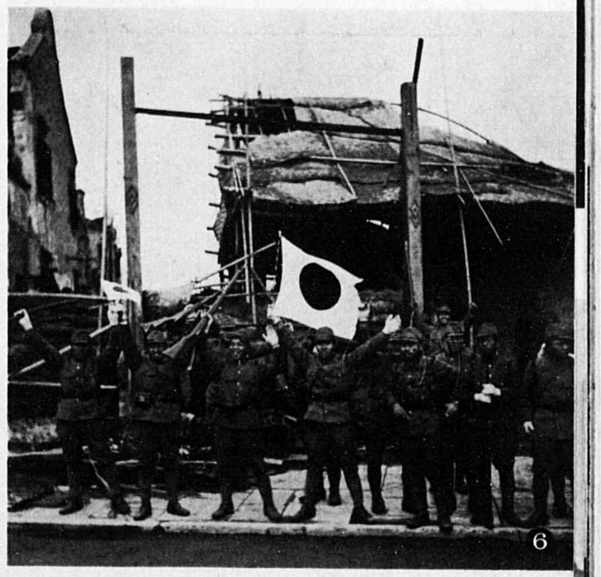
⑪油公司に出で、日本軍人の忠誠に、銃後の我らは一層、奮勵させられた。
小鳥の啼き聲がして、新戰場に來るべき日の平和がほゝえましい。



⑤街のバリゲートを占據した少年團の萬歳といひたいが、さうではない。
街の辻々を守備なさる兵隊さんを御慰問した時に、うれしくなつて思はず叫んだ萬歳なのである。

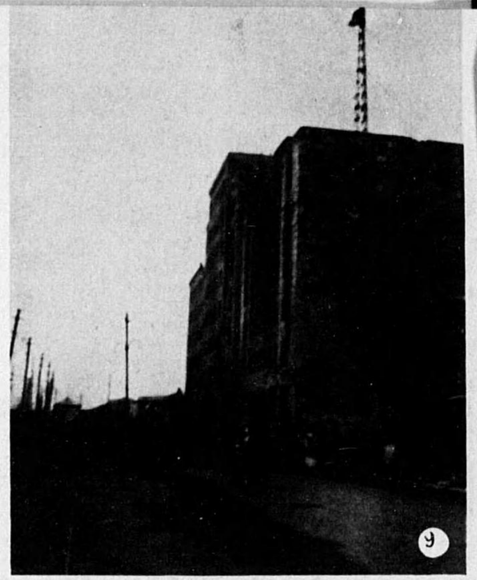
⑥道行く兵隊さんに、一一慰問文をわたす。
慰問する一行は、兵隊さんを見ると思はず萬歳を叫ぶので、兵隊さんも萬歳をかへしてくれる。

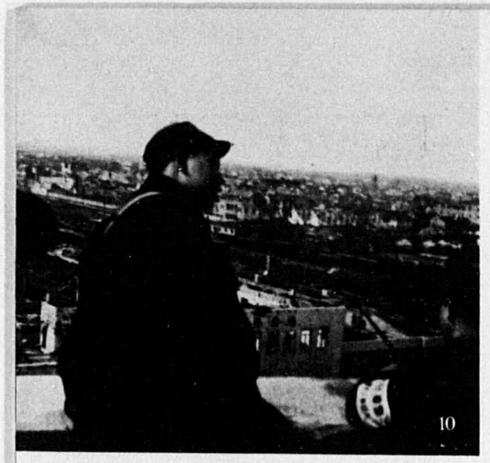




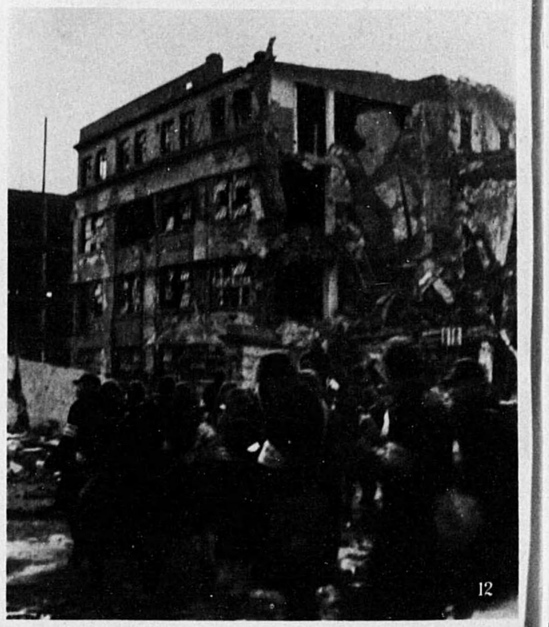
⑦支那軍は防備が上手である。
壕をほつたり、バリゲードをつくることは、中々たいしたものだ。
これはトーチカではい、バリゲードである。

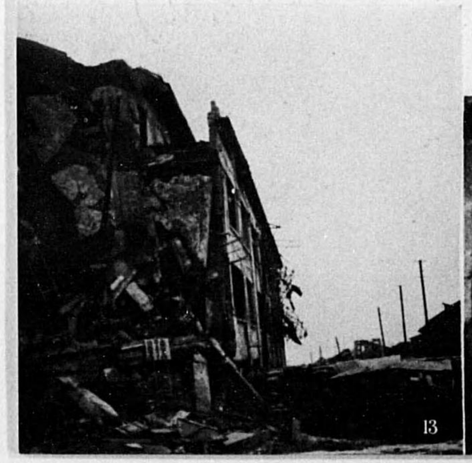
⑧堅固をほこる近代守備戰の花形、トーチカの前に立つ健兒！
トーチカもクリークも、日本軍人の前には、無力である。
近代科學も、精神力を度外視する事は出來ないのだ。

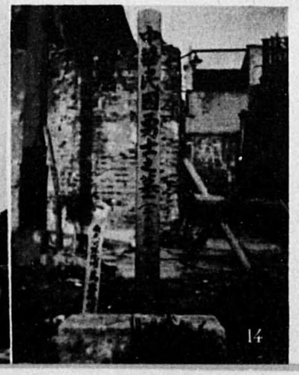




⑨鐵路管理局に我砲擊の苦心を思ひ、
⑩同屋上より問題のポケット地帶を望む。





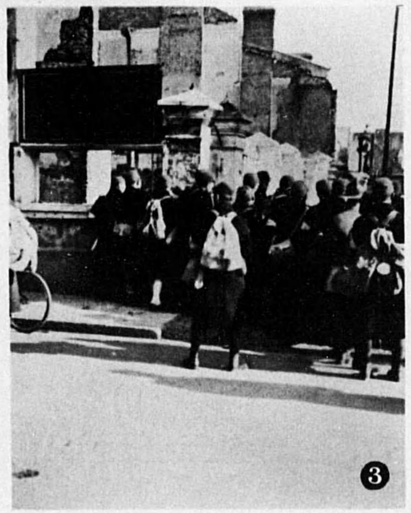


⑪正確なる我砲擊に破壞された北停車場。

⑫⑬名高い激戰地商務印書館見學。

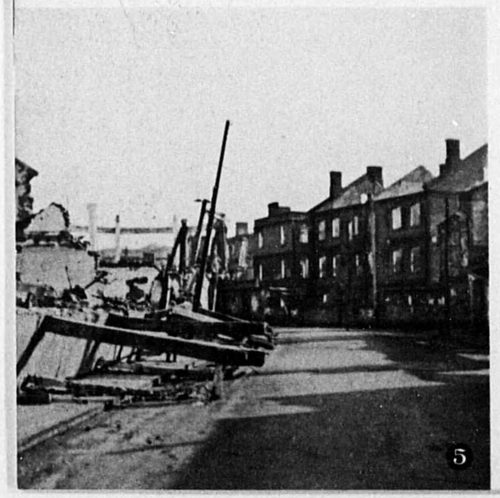
⑭街に我勇士の白い墓標がたてられてあるが、中にも中華國民勇士の墓が我軍の手によつてたてられ、花まで供へてあるのを見て、日本武士道の美しさに心を打たれた。

①② 一月二日上海神社に詣で、參拜の皇軍將士に慰問文をおくり、心から御慰問のたのしい語ひをした。

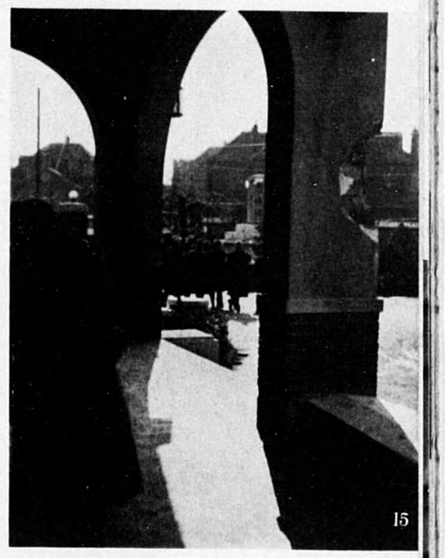


③公平路、茂海路にて激戰の跡を見學、皇軍將士の猛戰に强く心をうたれた。

④財神殿内に、頑强な抵抗をなした支那軍を、猛然擊滅した皇軍戰勝の跡を見學。

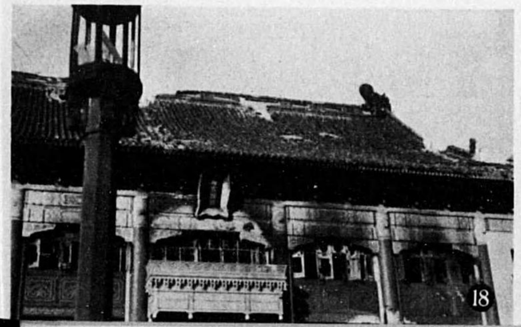


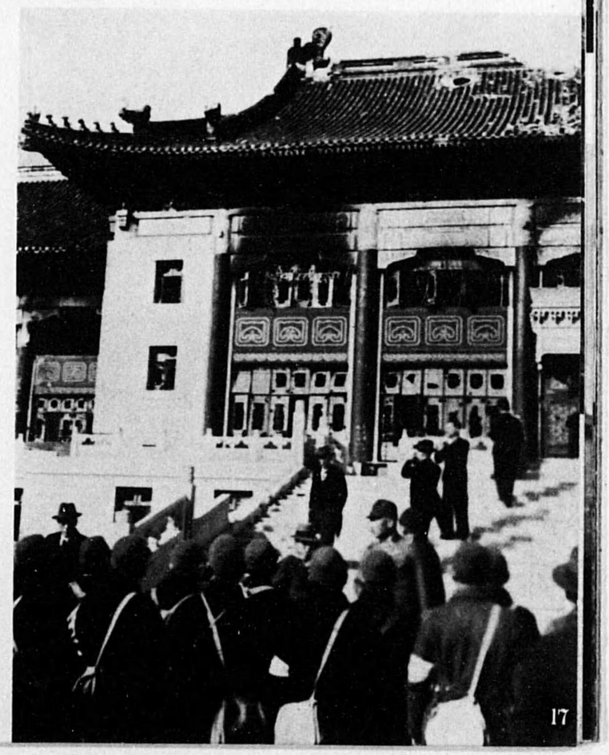
⑤頑迷な支那軍の戰車隊を、皇軍將士の勇敢なる奮戰によつて、殲滅した公平路、茂海路の市街戰の跡。

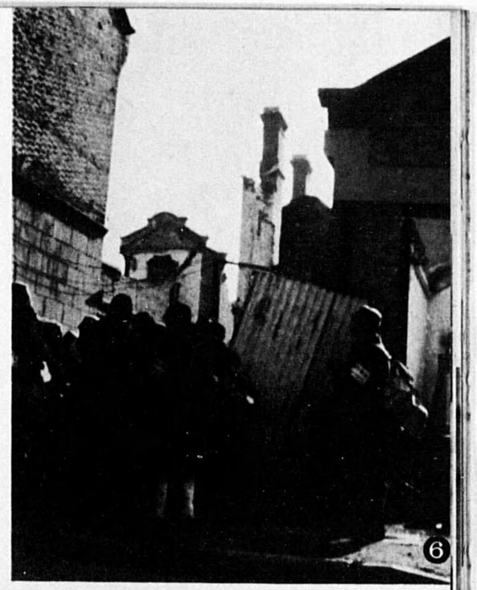


⑮⑯ 春光にかゞやく陸軍武官室を訪問。松井最高指揮官を御訪ねして、御慰問の言葉を申上げたところ、大將より激勵の言葉をいたゞく。

⑰⑱ 臺華をほこつた舊上海市政府を見學。

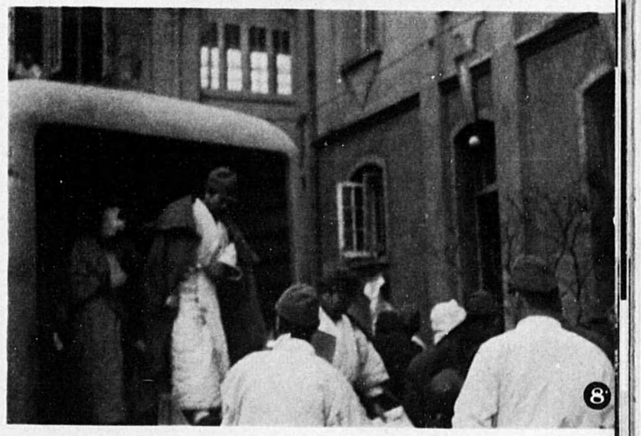






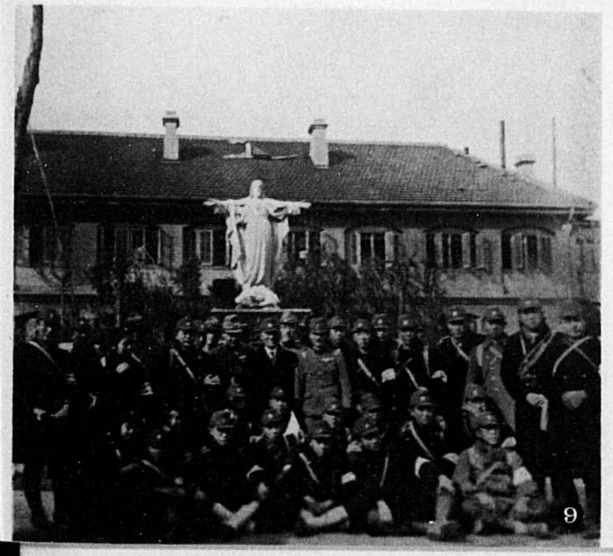
⑥皇軍艇身大奮戰の跡を見學し、當時の激戰を偲ぶ。

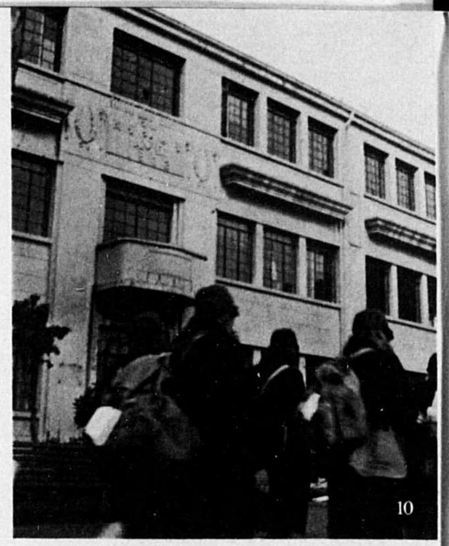
⑦兵站病院にて伊佐部隊長に御慰問の言葉をのべ、部隊長から懇切なる御言葉があつてから、四班に分れて、各病室を慰問した。



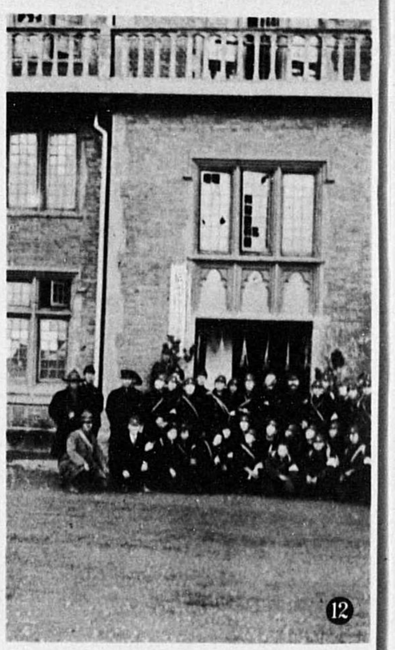
⑧南京入城にあたり、猛戰に負傷された皇軍將士を迎へ、心からなる御慰問をした一行。

⑨同兵站病院での記念撮影。

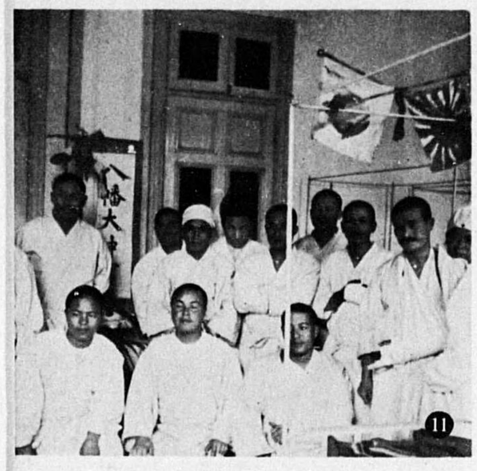




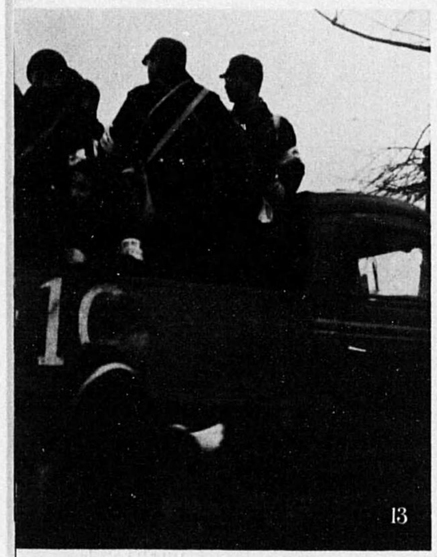
⑩兵站病院慰問の派遣團。



⑫〇〇を訪れ、御慰問をおへてから、場内を見學、精鋭をほこる我が海の荒鷲軍を見學。

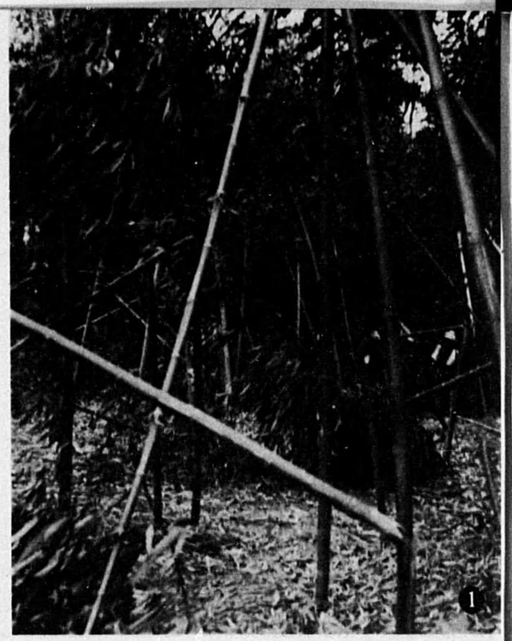


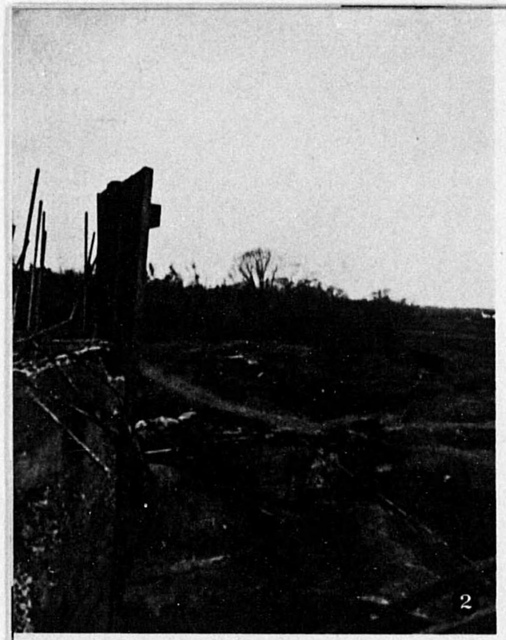
⑪病室に戰傷の勇士を訪れ、或は慰問文や、繪葉書、寫生、お菓子、玩具等をおくる。



⑬トラックにのつて、上海郊外の新戰場を馳驅し慰問につとめる一行。

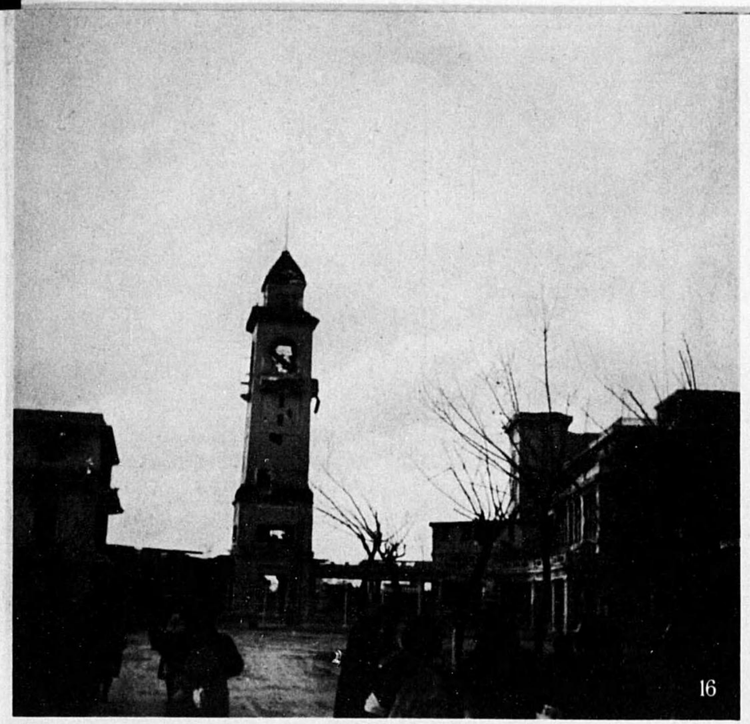
⑭飯田通りにでゝ虬江碼頭や、勇敢なる敵前上陸、竹下白襷隊奮戰の跡を見學し、大上海の明治通、大正通、松井通、加納通等の道路の名前に、ひとりでにうれしくなる。

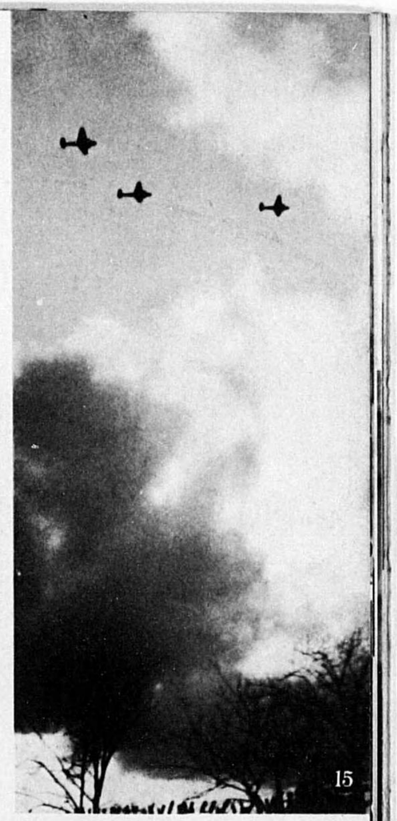




①一月三日、大上海攻略戰に皇軍の力戰した大場鎭に向ふ、竹藪にのこる激戰のあとに健兒たちは、この堅固なる陣地を拔いた我將士の勞苦を思ひ、しばしこのあたりを低徊する。

②③敵がはこる堅陣は、鐵條網、クリーク、トーチカ、塹壕とかためられてゐるが、忠烈なる皇軍の破竹の勢には抗すべくもなく多大の犧牲をはらつて、退却したのである。寫眞は大場鎭のトーチカ。



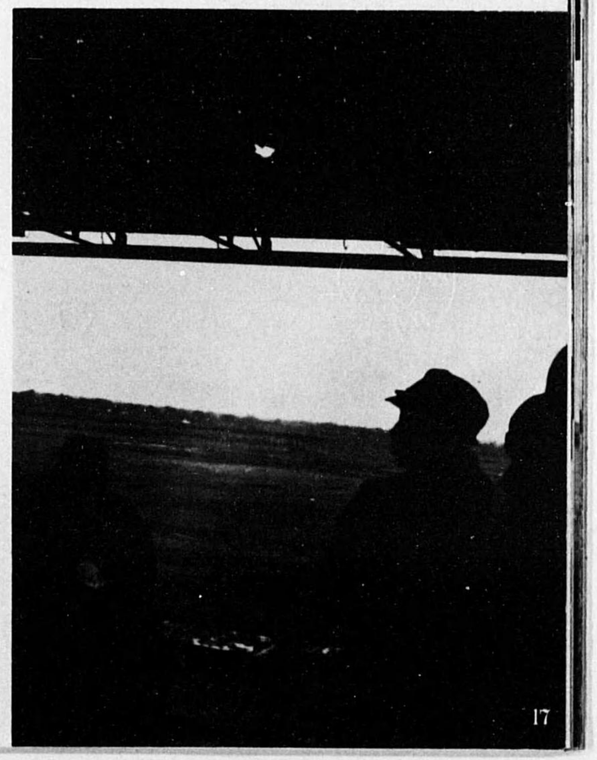


⑮南昌爆擊の任を果して歸還する我空軍。

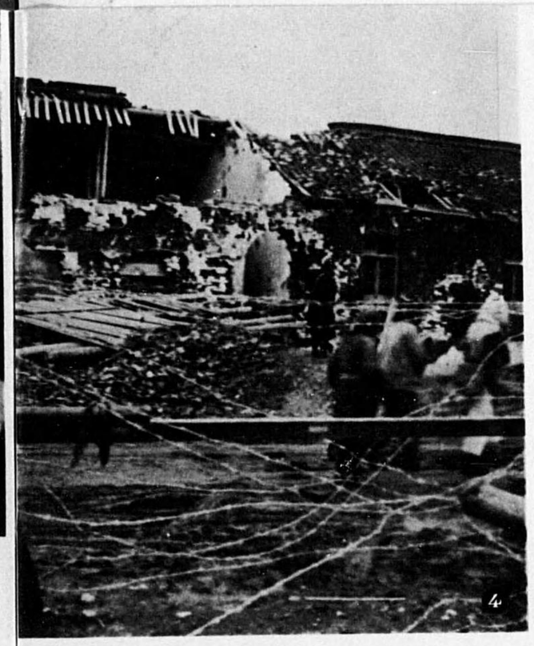
⑯江灣競馬場の時計臺に、我正確無比なる砲擊におどろく。

⑰上海戰線にて敵が堅壘をはこつた江灣競馬場。

⑱激戰のあと復旦大學。



④蘇州河畔に民家の壁を破れば中がトーチカになつてゐるといふ支那軍の秘められた防禦陣の計畫的なのにおどろかされる。



⑤虹橋飛行場の近く、大山海軍大尉の靈に禱りをさゝげる。北支事變が支那事變と擴大されたのは、實に暴戾な支那軍閥の無暴なる大山大尉事件である。

⑥虹橋飛行場の入口の門の壁の一部はトーチカになるといふ、正に戰鬪開始にきうきうとして努めてゐた支那軍のあまりにも計畫的な行動におどろかされる。寫眞は虹橋飛行場正門。

⑦⑧高橋部隊に至り、且つて少年團運動に盡力された隊長を慰問し、同隊の裸傳令岩田上等兵の勇壯なる戰爭談をきく。

⑨南市守備の川上部隊を慰問し守備の苦心を伺ひ、健兒一同は、部隊長の心のこもつたお湯一杯に、涙を流した。

⑩黃浦江に船體をかたむける我が日清汽船、こゝでも思はず暴戾な支那軍の行動に對して義憤の血がわきおこつて來る。

①一月四日ガーデン・ブリッヂを見學、橋上にて通行人をとりしらべる我陸戰隊。

②黃浦江を境として日本軍によつて秩序は嚴として保れてゐる。

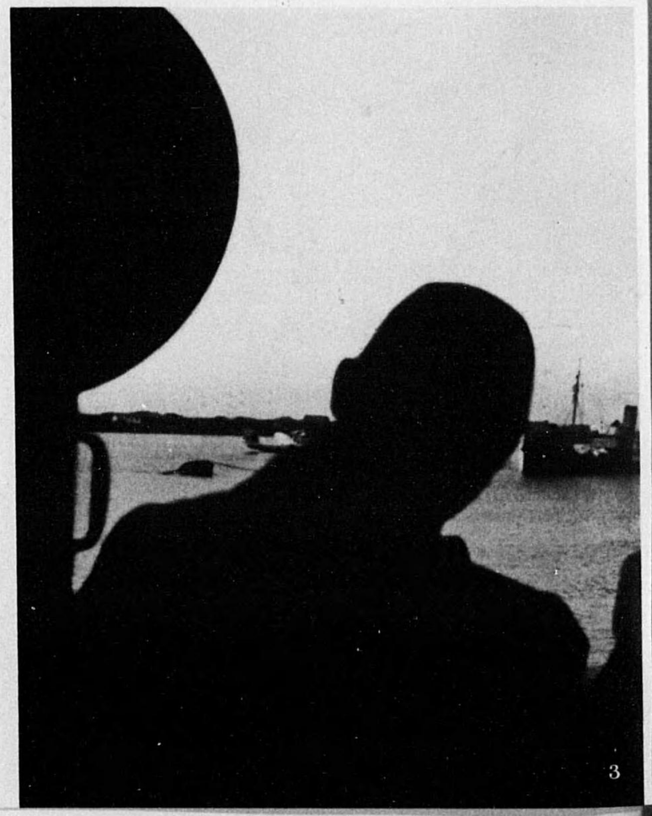
③さようなら！

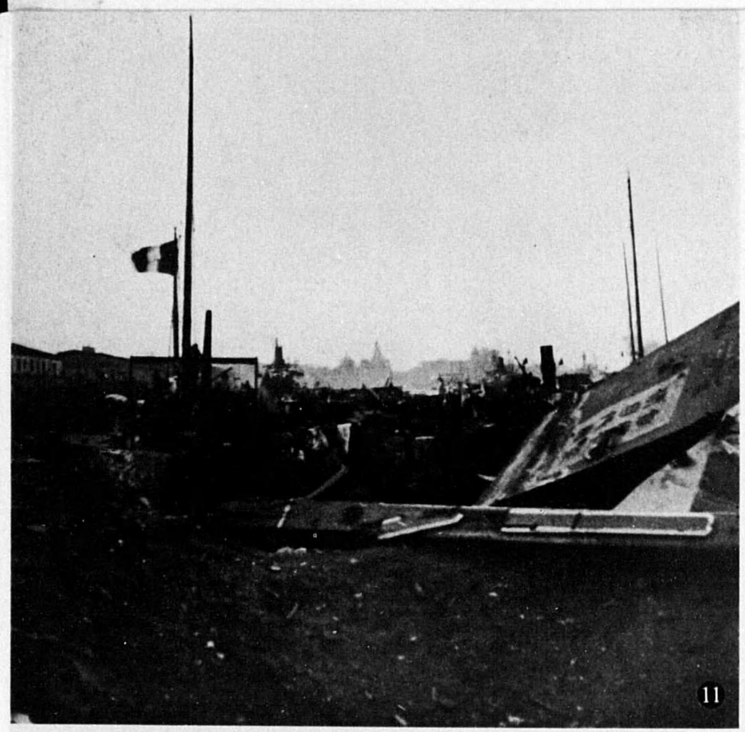
上海！

さようなら！

上海派遣皇軍の皆様！

皆様の御心勞と御努力に對して、只々感謝感激した。この感激を內地の人々につたへてます。そうして銃後は我々健兒によつて愈々固めますから、御健康で、しつかり正義皇國のために御努力を御願ひいたします。





⑪南市より三色旗ひるがへるフランス租界を望む。

⑫フランス租界に雜踏する支那人の水もらひの行列、前に立つてゐるのはフランスの守備兵。

⑬上海にも春は訪れ、一月から映畫も上映されて次第に秩序が回復してゆく。

その蔭には映畫館の前にある新らしい墓標の尊い皇軍の血がにじんでゐるのだ。我らは思はず頭を下げずにはおられない。

慰問團署名集

上海方面皇軍慰問感想記

皇軍慰問の旅を終へて

團長　酒井幾造

全國加盟團の中より選定せられたる上海方面皇軍慰問團員は、舊臘二十八日長崎市の結團式場に向つて夫れ〴〵勇躍郷閭を出發したのであつた。

予もまた東京附近の團員數名と共に、暮迫る二十七日午前、多數知己縁故の人々より熱誠なる見送を受けて、東京驛を出發し長崎に向つた。横濱を皮切に沿道各地の物凄い見送の中に參加團員を合しつゝ、二十八日午後長崎に到着した。そして直に長崎少年團の案内にて市の守護神諏訪神社に一同參拜、派遣團の一路平安無事、使命達成の祈願を行ひ、次で森嚴なる同境内にて結團式を擧げ、團長の訓示、隊長の諸注意を述べ終りて、長崎少年團と記念の撮影を行ひ旅舍に入り明日の出發を前に色々と準備を整へた。

慰問團員は十四歳より十八歳迄の男女健兒で、團長以下三十名、四班に分ちて行動隊の編成を行うた。

明くれば二十九日、團員一同は地元少年團始め多數父兄知己等の溢るゝ如き熱烈なる歡送と激勵の辭を受け、彌榮を交換しながら長崎丸に乘船、午前十一時拔錨、船は徐々に岸壁を離れて港外に向ふ。五島列島南端大瀬崎を廻る頃より多少船は搖れたるも、概して平穩に航海を續け、此の間甲板にて健兒に對し各個部隊の訓練を行ひ、三十日正午前早くも黄浦江に入り、午後一時過ぎ郵船棧橋へと船は横着けになつた。

棧橋には上海少年團幹部多數の出迎ひあり、團員一同は緊張の色一段と深く、上陸準備を完了し船内にては團長隊長團附と上海少年團幹部との間に、爾後の行動順序に就き打合を行ふたのであつた。

今、左に日時を追ひ、行動の順序に從つて、日記體に概要を述べて見る事にする。

第一日（上陸當日十二月三十日）

船が黄浦江に入りて間もなく、左岸共同租界の邊り多數の家屋が兵火に罹りて慘狀を呈しあるを見るにつけ、戰鬪の激しかりしを第一に思はしめた。右岸には數多き倉庫の殆んど大部に英國旗が揭げられ、而も破壞を免れあるなど、我軍の正しき戰鬪行動を感ぜしめる一面、强大なる利權を有する英國の姿を見る樣に思はれた。船が航行するに從ひ我が軍艦〇〇の勇姿を見る事が出來た。誰しも一樣に心强く頼母しく思うた事であらう。やがて上陸、徒歩にて軍艦〇〇を訪れ、甲板上にて長谷川司令長官以下の諸官に面接し、健兒代表出でゝ慰問の辭を述ぶれば、司令長官は誠に容姿端正、溫和の内に凛として、而かも撫するが如く愛するが如き、懇切なる

謝辭を以て答へられ、終て甲板上に我が慰問團と共に撮影を行ひ、新聞社亦我等に「カメラ」を向ける事頻りなり。次で司令長官以下將兵の萬歳を三唱して辭去し、日本總領事館を訪問、慰問の辭を述べて後、職員の案内に依り階上に至り黄浦江と浦東を望みつゝ、我軍艦〇〇を狙ひし敵の魚雷の爆發狀況及浦東より領事館目がけて打出す敵の砲撃等の有樣を聽取り、一同當時を偲んだのであつた。次で今尚ほ淋しき街道を而も武裝凛とした我水兵、體軀偉大の印度巡警に依る警備の中を行進して、日本居留民團に到着した。此處では民團長に慰問の辭を述べ民團長亦謝辭を述べられ、後門前に團員一同と撮影を行ひ、更に海軍武官室並に陸軍武官室に到り、前同樣健兒代表に依り慰問の辭を述ぶれば、夫れ〴〵深き感謝の念を以て謝辭を述べられ、且つ健兒に對し事變の現狀を見、併て國家將來の事を考へ、第二國民として愈々心身の鍛錬修養に努め、國家の柱石となる樣訓話せられたのは、誠に一同の深く感激せる處であつた。殊に陸軍武官室にては少女の慰問が一段の感動を與へたる如く、面接せられたる武官も落涙暫し言葉も出でざりし狀態なりき。予亦思はず眼の熱するを覺へたのであつた。此慰問を終へて宿舍たる北部小學校に入つた。宿舍は同校三階の教室にて疊を敷き、火鉢あり毛布あり、又別に食堂あり、設備實に完備して居る。之は偏に上海少年團長以下各幹部の涙ぐましき盡力に依るものと、今一つは〇〇隊の隊長以下將兵の深き心盡しの數々に依るものであつて、誠に一同はいたく感謝の念に滿ちたのであつた。

第二日（十二月三十一日）

夜來の細雨尚竭まず朝來しと〳〵降る中を、團員一同は先づ上海神社に參拜した。社殿は敵彈の爲め一部破壞せられしも、今は立派に修繕せられ社殿の一側には五年前の上海事件に於ける犧牲者白川大將以下將士の英靈を祭る招魂社あり、一同は拜禮の後海軍陸戰隊へと歩を進めた。

陸戰隊の營門を入れば、元氣横溢の水兵諸君が一心不亂に業務に活躍しある狀態を見る事が出來、誠に心強く感じた。一同が本部前に整列すればやがて溫容を湛へた司令官臨場せられ、而も雨中に起つて我等の慰問を受けられ、一場の謝辭あり、次で慰問品を贈呈し、後一同は辭して陸戰隊病院に到る途中、營内の外側に戰沒將校の墓標あり、伊藤健兒（仙臺）進んで讀經し一同禮拜をした。終りて病院に入り慰問を述べ、次で院長は我等一同に對し病院の狀況殊に患者の狀態を話され、後各病室を廻りて患者を慰問し、健兒は各自携行せる慰問の品を各患者に贈呈すれば何れも深く感謝の念に打たれたる如く、中には涙を流して謝辭を述べたる水兵があつた。又中には懐しさの餘り自己出身地健兒の有無を問ふものもあり、誠に感激の場面であつた。それより病院の屋上に登り院長親しく閘北一面八字橋附近を指して、當時の戰況を物語られ、且つ敵の砲彈が病院の諸處に印せられたる彈痕を指示せらる。今は大部分修理を了りあるも見るからに其跡の如何にも慘憺たるを覺へずには居られなかつた。かくて時を移す事時餘にして辭去し、一同は八字橋の戰場を中島先生等の案内にて見學しつつ、日本人墓地に到り忠魂碑を參拜し、島津氏（五年前の上海事變の際上海少年團員として大に活躍し遂に名譽の戰死を遂げられたる我等の同志なり）の墓前にぬかづき、墓地附近の支那兵に依り築かれたる陣地を見ながら、西に進んで廣中路の激戰地に到着した。此處は有名なる陸戰隊の激戰地である。街道を挾んで彼我の構築せる陣地に據り、幾十度となく繰返されたる突進・突擊・逆襲、爲めに死傷算なく、今尚敵の屍處々に露出し、未發手榴彈など點在し、殊に貴志大尉の寡兵を提げて先頭に突進し、部下を勵ましての奮戰中名譽の戰死を遂げられたる地點の前面にはいとも堅固なる敵陣地があり、如何に戰鬪激烈なるやを思はしめた。一行は貴志大尉の墓を拜し、次で學東中學・愛國女塾を見る。何れも我空爆の爲に跡方なき迄に爆破せられ、我空爆の威力に今更ながら感嘆したのであつた。敵の陣地は愛國女塾の周圍を取卷くのみでなく、女塾の床下には地下道を設けて諸陣地との交通を完全容易にし、到る處に障害物を築きあるなど誠に強大なる家屋防禦陣地を整へたるを見ると共に、我兵の攻擊が如何に勇猛果敢であつたかが察せられるのである。更に歩を轉じて油公司・開林公司に

到る。當時我武部兵曹長以下十數名の陸戰隊兵士が此等公司に據て怒濤の樣に押寄せて來る敵を向ふに廻し、奮戰能く之を擊退したる狀況につき、中島先生より懇切詳細に現場を指しての話を聞き、我等一同大に三嘆三賞せざるを得なかつた。此の見學を終りて歸路につき、此夜八時より宿舍に於て〇〇飛行隊長が態々激務の餘暇を割いて、我等慰問團の爲め飛行隊の實戰談を熱心に講話せられ、健兒一同に甚大な感動を與へられた事を特筆感謝する次第である。

第三日（一月一日）

此日、天朗に日本晴れ、午前十時、陸戰隊〇〇隊と共に小學校々庭に東面整列し、陸戰隊の喇叭の音につれて遙に宮城を拜し、聖壽萬歳を三唱したる後、陸戰隊〇〇隊本部を慰問し、慰問品を贈り、次で中島先生其他諸先生の案内にて虬江路鐵路管理局・北站驛・寶山路商務印書館を見た。虬江路の街道辻々には堅固なる土嚢陣地、さては强固なるトーチカ陣地あり、我水兵が元氣で警戒の目を放て居る態度、誠に頼母しき限りであつた。鐵路局は宏大なる建物なるも今は我猛爆砲撃の爲め處々破壞され、殊に内部は全く空虛にて、慘狀を呈しある樣も蔣介石抗日の因果を物語つて居る樣に思はれた。

此の鐵路管理局は南に一つの街道を隔てゝ租界がある。我空爆砲撃の跡は無數に管理局周圍にあるも、隣接せる租界には殆んど跡なきを見た、如何に我砲撃空爆の正確なると苦心の射撃をなせしやを思はざるを得なかつた。其他商務印書館及び同圖書館等の破壞せられある樣誠に自業自得の致す所である。正午過ぎ宿舍に歸り晝食の後、陸軍武官室〇〇將校の案内にて軍司令部に向つた。午後二時半過ぎ軍司令部に着いて一同司令部前に整列すれば、威容嚴肅なる司令官は特に一同の前に歩を進められ、親しく健兒よりの慰問の辭を受けらるゝと共に、健兒に對し有益なる訓示を與へられ、一同大に感激し、次で撮影を行ひ、慰問品を贈呈して辭去し市政府に到つた。見るからに壯大華美贅を盡した建物も、我砲爆撃の爲め屋根は處々に大なる孔を開け窓は破れ、内部は構築美を盡しあるも、諸物散亂誠に主なき姿の憐を止めるのみである。裏手には孫文の立像足部のみ殘りて其姿を偲ばしめた。此處にて若干休憩し後歸路に就き宿舍に入つた。

第四日（一月二日）

此日前日に引續き快晴。午前九時宿舍を出て上海神社に詣で、後昨日より開通を見た興中公司のバスに乘つて共同租界を進む。中途下車して公平路の月岡部隊奮戰亂鬪、接戰瓦礫合戰の跡を偲び、徒歩にて〇〇部隊病院に到着、傷病兵を見舞うた。先づ健兒が病院長に對し慰問の辭を述ぶれば、院長之に答へて深甚の謝意を表せられ、自ら我等一同を一室に招かれ、戰利品を一々説明の上觀覽に供せられ、次で受持軍醫の案内にて健兒を四班に分ち、各班は夫れ〴〵各病室を見舞ひ、健兒は各自携行せる慰問品を贈呈すれば、將兵は何れも感謝の涙に濡れ、殊に一脚を失ひたる將校の如きは流るゝ涙も止め得ず、只有難う〳〵の言葉のみ胸迫りたる姿は我等の深く胸裡を打つた處であつた。亦廣き兵室に行つた時の如きは何れも異句同音に自己の出身地を告げて同郷の健兒を求め、健兒に面接せばまるで自分の兄弟にても遭うた時の樣に、嬉し涙さへ浮べて何吳れとなく聞くのであつた。將校の如きは健兒を見るにつけ、我兒の上に思ひを走らすのであらう、涙を浮べ、健兒の姿を見つめ、深く感謝の念と健兒をいたわる樣の面持ちに見へて誠にゆかしき極み、我等一同言ひ知れぬ感に打たれたのであつた。院長始め傷病將兵の言葉は次の通りであつた。

「此迄慰問團はかなりあつたが、少年少女の慰問は今回が始めで、しかも我々の胸を打ち感激に滿ちた事は今日程甚しきものはない。少さい子供が遙る〳〵海を越へて慰問に來て吳れる其心根を思ふ時泣かざるを得ない」

一同は病院の裏庭にある氣持良き芝生の上で晝食を取り、一同撮影の後心を殘して病院に別れを告げ、俘虜收容所を見學して、俘虜の規律正しきに感を深くして辭去し、更に飛行隊を慰問し飛行場を巡覽して多大の教訓を得、飛行隊長の心からなる茶菓の饗應を受け、午後四時前夕陽は次第に

西の彼方に傾かんとする頃辭して歸途に就いた。中途竹下部隊白襷隊奮戰の地を弔ひ、次で走驅江灣鎭の競馬場についた。東洋一を誇る競馬場は我空爆の爲め建物は完膚なき迄に破壞せられ、又時計臺も我砲擊に依り中央に大なる穴を殘して稍傾きながら其儘に聳へて居つた。戰鬪中此の臺上で敵が四方に信號をもつて指揮して居た事を聞き感慨一番だつた。斯くて見學を終り夕闇迫る頃宿舍に歸つた。

尙ほ江灣鎭に行く途中、復旦大學の附近で、支那のガールガイド指導者養成學校が堂々建つて居つたのを見た時、蔣介石が如何に童子軍の訓練に意を用ひて居つたかを感得したのであつた。

第五日（一月三日）

此日朝來曇りで寒風吹き荒ぶ午前九時過ぎ、陸軍武官室より〇〇將校トラックを伴ひ來られ、我等一同を大場鎭へと案內せらる。中島先生同行、中山路を走りて西すれば、やがて目指す大場鎭へと到着した。見るからに陣地はクリークを前に控へ、其の强固長大疊重せる、殊に藪の中にある陣地構築の如き驚嘆せしむるものがあつた。

高地にある陣地トーチカが互に深き交通壕に據て連絡し、各家屋內部には地下室を設け、如何に支那軍が多數の日數と人夫を費したるを知ると共に、勇敢なる我兵の攻擊の前には何の役にも立たず、此陣地を攻擊せる我兵の優越せるを覺へたのである。大場鎭を去つて蘇州河畔の戰場を弔ふ爲めに車は南方へ向て走つた。工場の職員、孤立無援、能く最後迄死守した有名なる豐田紡の一側を通過して敵の陣地に到着した。延々長蛇の陣形其の一端を探れば、敵の遺棄せる死體忽ちにして百餘を算し、爆彈を携へ或は鐵兜に身を堅め、又は防毒覆面を携帶したまゝ倒れたる姿、殊に十四五歲より十七八歲の靑少年童子軍が犧牲となりあるなど、誠に眼を掩はしむるもの數知れず、〇〇將校の說明に依れば、彼等は退却の瞬時、我砲彈の爲め戰死したのであるとの事、我等一同心の內に懇ろに之を弔ひながら、此處を去て大山海軍大尉兒双に倒れし地に到る。其跡には今尙ほ木の香も高き墓塔あり、一同禮拜して之を弔ひ、次で其近くにある敵の飛行場を見た。門柱悉くトーチカにて造られあるには一驚を喫したのであつた。〇〇將校の案內にて之より南市に向うた。途中嘗て少年團に關係のあつた高橋準隊に立寄り慰問し、それから佛租界の一側を通過し、到る處にある佛國旗と佛國の步哨を眼の內に收めながら、南市警備〇〇部隊本隊に着いた。着後直ちに黃浦江畔に行き、我日淸汽船會社の船六隻が敵手の爲めに閉塞用に沈沒せられあるを見て感慨無量であつた。終りて警備隊に歸り部隊長の案內にて同隊屋上に登り慰問の辭を述べ、次で南市一般の狀態と警備の苦心談を聞き健兒に一入の敎訓を與へらる。暫くにして辭去し租界の夕景を見ながら宿舍に歸着した。

第六日（一月四日）

此日晴天。健兒を三班に、少女を一班となし、上海少年團幹部諸先生の案內にて市中見學をした。先づ中部小學校に到り、同校長先生の詳細に亘る戰鬪苦心談を聞き、屋上より四圍の戰場を眺めながら當時の戰況談に耳を傾け、我勇士の奮鬪振りを偲び、それから市內各所にある著名の建物並に場所、殊に「ガーデンブリッチ」に於ける英國及我水兵の警備狀況、橋行く人の查閱を受くる有樣等を見て、步哨の並々ならぬ勞苦である事を感じさせられた。次で東西兩本願寺に奉安しある我陸海軍諸勇士の英靈に讀經禮拜し、後各自思ひ〳〵に若干の買物を了して午後二時頃宿舍に歸つた。尙引續き健兒の希望者には午後四時迄見學を許可し、團長隊長は各官衙軍艦等を歷訪して御禮と明日上海離港の挨拶を述べた。

午後七時半より健兒一同を一室に集め、營火に代ゆるに座談會を行ひ、各自所感の一端を述べさしたのであつた。健兒の所感は何れも當を得て誠に感服の至りであつた。午後九時過ぎ終了した。

第七日（一月五日）

此日天氣良好、愈々出發歸國の日が來た。各健兒は前夜來の準備不足を

補ひながら、各室の淸掃に努めつゝ時の來るを待つた。午前十時校庭に集合すれば、〇〇隊は隊長以下全員營門內に整列して我等一行を見送らる。一同は隊長と互に別れの言葉を交はし、萬歲聲裡に營門を出で、トラックに搭乘して棧橋に向つた。中島、渡邊先生同乘せらる。やがて棧橋に到着すれば直ちに船內定めの室に入り出港を待つ。時移りて正午となる頃〇〇隊長始め松本少年團長以下幹部、民團長、總領事館員等の鄭重なる御見送りあり、午後一時出港の合圖と共に、送るもの送らるゝもの互に彌榮を絕叫しながら別れを惜む。やがて船は黃浦江を下り、上海の姿は逐次彼方に隱れたのであつた。

船が次第〳〵に揚子江外に航行し、波浪其の度を高め、幕幕海面を掩ふ頃より船體の動搖稍大きくなつた。然し健兒一同は何れも元氣で、無事翌六日長崎に到着した。長崎港に入る稍前　〇〇宮殿下の御乘船遊さる上海丸と遭遇した。健兒は勿論、船客船員一同、甲板に整列し奉送萬歲を唱へ一路御平安を祈り奉つた。

長崎港には同地の少年團全員並に健兒の父兄達が棧橋に出迎へ、無事使命を果し歸還せし事を心より祝つて頂いた。上陸後解團式を行ひ、それから長崎市長の我等一行に對する心盡しの歡迎會に臨み、午後十一時同地發の門司行列車に搭乘した。

かくて健兒は各我家に向て勇躍歸路に就いたのであつた。團長は沿道各地の健兒と共に同車し、途中逐次健兒並に出迎の父兄や少年團幹部の人々に別を告げつゝ、八日午前九時三十分無事東京驛に歸着した。驛には多數の出迎者あり、誠に嬉しき限であつた。

以上は實施行動の概要である。尙上海の宿舍に於ては每朝七時起床後若干時杖を以ての體操、及び部隊訓練を一同熱心に實施せる事を追記する。

扨て今回の慰問行動が誠に順調にしかも豫期以上の良果を得、玆に無事使命を果し得た事は、先に貴族院議員慰問團の一員として上海に赴かれし我少年團の理事三島先生の事前に於ける熱心、且つ適切なる諸工作と上海少年團長松本先生始め團幹部諸先生の犧牲的精神の發露に依る日夜寢食を忘れての御盡力、御指導の結果と他方軍部の深大なる御愛顧御示敎の然らしむる處であつて、殊に陸戰隊將兵各位の熱誠な御懇情が大に力ある事である。尙更に忘れてならぬ事は內地沿道各少年團幹部以下多數健兒並に健兒父兄等の熱烈なる御歡送と激勵の言葉であつた。

玆に滿腔の誠意を披瀝して以上の各位に深甚の謝意を表する次第であります。

所感

隊長　田村喜一郎

地球上戰史に比類なき赫々たる威武を輝かせる我皇軍の猛戰中にも海の荒鷲の大奮擊は、外つ國輩の心膽を寒からしめ、世界戰史に特筆大書するの偉功を奏したることは、我等國民銃後にあるもの、等しく感謝、感激惜く能はざる所で前線に在る將士各位に對し謹で敬意を表する次第である。

玆に於て大日本少年團聯盟は昭和十二年十二月上海方面皇軍慰問團を編成し同十二月二十七日一行三十名の少年健兒及少女健兒を派遣することになつた。參加健兒は全國各團より選拔されたる優秀健兒であつた。

今回の慰問團は前例と異なり、全くの少年少女からなる編成であつて、十四歲より十八歲迄のもので、年長者は團長、隊長、團附の三名に過ぎず健兒二十七名中少女四名參加し、之を四個班に別ち、各班には班長、次長、記錄、傳令、又隊附健兒、連絡健兒等夫々任務を擔當せしめ、而て團の行動一切は特殊のものゝ外悉く軍隊に準じたる動作及び日課を實行し、臨時集團の編成團ではあつたが、豫期以上の成績を得た。要するに各自が共責任觀念を重んじ、各々の分掌を實行し、班の一致共力の結果と又團長

酒井先生の御指導の賜であらう。

感謝

滯在中は海軍陸戰隊〇〇隊と同營舍内に宿舍を許され、海・陸兩軍部より多大の御便宜を賜はり、一行は頗る元氣に行動することを得、豫期以上の慰問と、戰跡見學が出來たことは銃後の國民として得る所甚大なるものがあつた。

謹で兩軍部に對し感謝の意を表す。

慰問、見學範圍は別に記錄されてあるから重ねて述べる必要はないから省略する。

然しながら特に感慨深きものは、陸戰隊の寡を以て克く衆を壓し續け、市街の辻又辻或はクリーク及び橋畔附近に建てられてある新らしき墓標は涙なくして參拜は出來ない。是に一々御供と線香、御花を捧げる同僚のやさしき心、通行者の感謝、感激の參拜光景は誠に言語に盡せぬものである。

終りに本一行に對し終始御懇配を頂いた日本人少年團長松本康生先生始め中島、渡邊、高瀨各先生に對し厚く御禮を申上ぐ。

上海に皇軍を慰問して

團附　若宮　正

出發

杖とりて皇軍慰問の旅に立つ健兒の姿りゝしくおゝし

陸戰隊本部

へんぽんと風にはためく海軍旗勇士の武勇かたる如くに

軍艦出雲に長谷川司令長官を訪ねて

銃後をば健兒の力でかためよ名提督はわれらはげます

油公司にて

つはものゝ命一途に戰ひし油公司に仰ぐ日の丸

中型攻擊機のとぶを見て

仰ぎみる江灣鎭の時計臺爆音かるく中攻のとぶ

兵站病院を慰問して

感激の聲ふるはしてのべられし感謝の言葉に健兒らは泣く

北停車場にて

激戰のあとしのばるゝ停車場白き墓標にいのりさゝげぬ

大場鎭にて

このあたりみなクリークにかこまれてトーチカににぢむ黑き血の色

松井最高指揮官を訪ねて

戰勝の春の光りにほゝえみて我ら迎へる將軍のやさし

慰問文

さし出す慰問文をばうけとりてひげの勇士ら萬歲さけぶ

上海皇軍慰問團に參加して

隊附　小西金之助

二十七日、遂にまちにまつたる日は來た。出發だ！

我等の決意は益々高まり緊張はその極に達した。希望に充ちた列車は到着した。いよ／＼旅途の第一歩である。汽笛一聲諸共に東邦健兒の樂の音は構内一ぱいに轟き渡り、列車は歡呼の聲に送られて一路上海へ／＼と驀進した。途中長崎にて長崎丸に乘船し、日本を後に怒濤を蹴つて進んだ。明れば三十日海の色が變ずるや、いよ／＼大上海も目前に迫つた。河畔の枯草の間から翩翻とひるがへる日章旗を見た時、我等は思はず帝國臣民としての力强さを感じた。

午後三時上陸するや旗艦出雲へ、綺麗に淸められた甲板上に立つて居られる長谷川長官の御姿に思はず頭の下るのを覺え、慰問の挨拶に、支那海の荒波をものともせず海上封鎖四ケ月、その任を果した海の勇士に心から感謝の念を捧げた。翌日八字橋の激戰の跡を見て陸戰隊の精銳が何十倍の支那正規軍を相手に死守した當時の有樣を頭に浮べ、土壘の上に建られし貴志中尉戰死の眞新しい墓標に感激の涙は折から降りしきる小雨と共に私の頰をぬらしました。廢墟と化した愛國女塾の姿もわが居留民を一擧に皆殺しにしようとした、血迷つた支那軍の猛攻にも屈せず一歩も退かず土壘のみの陣地を確保し居留民保護とわが權益擁護の肉壁となつた陸戰隊勇士の奮戰ぶりを目の前に見たかの樣な感に打れました。

あれ果し新戰場に涙雨

ふりて忍ばん激戰の日を

戰勝の新春第一日に松井大將にお會ひして心からのお喜びを申し上げ、愛國の至情に燃える將軍の言葉を肝に銘じ僕も今に立派な軍人にならうと決心した。からつと晴れた冬空に聳ゆる上海市政府の屋上高く翻る日章旗に敬意を表しつゝ立派な建物に海の荒鷲の壯烈な空爆の跡を見學し、日本空軍の威力はたゞ驚嘆するばかりであつた。

二日白衣の勇士を慰問すべく内地の人々の眞心あふるゝ慰問品を手に手に持つて、ベットに打伏す兵隊さんに、慰問品を渡す手も、受取る人の手もふるへ「俺は名古屋だ、お前はどこか」と問はれて驚き「僕も名古屋です」といふより早くもう涙。

「よくきてくれた、俺は弟にあつたより嬉しい」と言つて僕の手を握る氣持は僕も同じでした。

ありし日は勇んでたちし勇士等の

ベットにふせる姿尊し

俘虜收容所に於ける捕虜を見て敗戰國の兵が如何に哀れであるかといふ事をしみ〴〵痛感した。然しその態度はいかにも日本に馴れて皇軍の恩に親しんでゐる樣に見へた。

翌日我が鄕土の誇りとする川並部隊奮戰の地大場鎭の戰跡をたづね、トーチカ、クリークをはじめ支那軍の築いた塹壕を見て私の想像以上のものにたゞ目をみはるばかりで、如何に我が軍が苦心して戰かつたかを充分に知る事が出來た。だがその裏面にどれ程多くの犧牲がはらはれたかが親がはれた。

戰勝のかげに護國の人柱

世界に誇る日本魂

又蘇州河畔の戰跡は、あちこちに死體の横たはつてゐるのを見るだけに今迄より一層悲慘な感に打れた。支那正規兵の死骸が收容もされず、クリークの濁り水の中で目をむいてゐる哀れな姿に今の自分が日本帝國臣民として　天皇陛下の御稜威のもとに生れたことを深く喜びに感じました。

それを考へると帝國の軍人が戰場で　天皇陛下萬歲を叫ぶ悲壯な聲を最後に死んでゆくその尊い精神を幾分なりとも窺ひ知る事が出來た。

皇軍の血で染られた丘上に、淋しくも力强く立つてゐる勇士の墓標、

つはものがたほれし友のなきがらに

涙むせびて告ぐる新年

冥福を祈る私の目にも熱い涙を感じた。

皇軍の勇士の墓標とともに中華民國勇士之墓と記された大きな墓標に林檎や蜜柑をはじめお正月の餅まで供へてあるのを見て日本武士道の世界に誇る所以はこれを見ただけで十分であると感じました。

重くるしい汽笛は我々に色々の印象を與へてくれた大上海との別れの合圖であつた。

手をふる者萬歲を叫ぶ者、次から次へと上海に於ける思出が走馬燈の繪の如く私の腦裡を過ぎさつて行つた。そして敗殘國のみじめさを、ありありと思ひ浮べ、戰ふ以上は必ず勝ねばならぬ事を實際に敎へられた。

心よりの感謝

伊藤秀光

一、長崎丸で揚子江に入り、黄浦江を遡るにつれて、海岸の毀れた家屋が段々見えるやうに成つて來た時の感じは、たゞ、

「此處が戰地かなあ」

と思つただけでしたが、やがて着陸した時に、上海の日本人少年團の幹部各位や、其の他の方々が私達の爲に、態々お出迎へ下さつたので、私はほんとうに嬉しさと有難さとで、胸がいつぱいでした。そしてあの上海に於て僅な日數ではあつたが、慰問もし、各方面の見學もする事の出來たのは誠に嬉さに堪えませんでした。

二、各地に於て肉彈戰のあつたといふ跡を見て、如何に惡戰、苦鬪であつたかは、はつきりと頭に浮びました。蘇州河の戰跡、大場鎭の戰跡、市内の戰跡、何れも私にとつて深い印象を殘しました。

三、蘇州河畔に於て支那軍の遺棄した屍體を見た時に、一層の悲哀を感じました。そして其の屍を見ると、まだ十七八歳位の少年と思はれる人々も居ました。あの哀れな姿がそれが支那人の屍體であつても私は涙を流さないで居られなかつたのです。

私は心の中で暴戾な支那軍閥のために無理に戰場にたゝされたであらう多くの支那兵を「これも人の子、人の親であらうに」と弔つて通りました。

四、大場鎭の竹藪で見たあの堅固な敵陣地が良くも陷落したものだと、皇軍將士の艱苦を心から感謝しないでは居られませんでした。

五、病院を慰問した時は、あの傷ついた將士の姿を見た時、私は何と御禮を申し上げてよいのか解りませんでした。ただ有難う御座いました。と言ふ言葉だけでした。

六、俘虜の生活を見た時、決して敗戰國民にはなれないと深く感じました。殊に田中大尉の御言葉の『戰爭をしたならば、勝たねばならぬ』と云ふお言葉を思ひ出し、誠に最もであると痛感しました。

以上の六項は私は此の短い日數ではあつたが、慰問並に見學をした時の重な印象であります。これを申上げて、私自身增々銃後の護りを固くすると共に、進ふ人々方にお話をして、眞に擧國一致、堅忍持久以て皇國のために盡さねばならぬと感じて來ました。

空爆の威力

高柳正介

上海上陸第一歩の感じは戰爭のかくも激烈なものかと云ふ事でした。家と云ふ家は悉くつぶれ、又は燒かれ、花の都と謳はれた上海も、今は荒野の都と化し空爆や砲彈のあと凄く、豪莊なるビルデングの窓のガラス等は殆どなく、大きい穴さへあき、さながら激戰の跡を物語つて居りました。

第一日目は軍艦出雲、上海總領事、居留民團、陸海軍兩武官室等を訪れ、何處に行つても皆非常に喜び吾々一行を迎へてくれました。

三十一日、上海神社、陸戰隊本部、同病院、日本人墓地、八字橋、廣中路等に行きました。一行は小雨降る中を上海神社に參拜、皇軍の武運長久を祈り、次いで陸戰隊本部訪問、所々に白く砲彈のかすつた跡もあるが、殆ど大した損害もなかつた。ついで陸戰隊病院慰問。病床に横たはる傷病兵、銃後の子供の熱誠に感泣しました。私達のめい〳〵の持つて行つた慰問品もさぞ喜ばれた事でせう。又そこに行つた時屋上や窓には大きな穴のあと等がいくつもありました。然しそこに居た傷病兵も、その寸前に安全な所に避難させた爲一人も微傷だに負はなかつたさうです。

次に八字橋廣中路等の激戰地に行つた際、この邊は全く激戰の跡を物語つて居りました。付近の家は全く破壞され、愛國女塾や油公司や、その他幾多の大建物も今はあと方なくこはされクリークには、机や椅子が投げこまれ、その上に板等がかけてあり、皇軍の勇士も、あられの如くとびくる敵彈の中をかう云ふ小橋をとび進んで居た事等思ひ出す度に感慨無量なものがありました。

そして附近は敵の不發の手榴彈や何かがごろ〳〵ころがつて居ます。又道の兩側にある下水の中に浮ぶ敵兵の姿も、未だ生々しい激戰の跡を物語つて居りました。

次の日、戰場で迎へたお正月、兵隊さんも緊張せる中にも和やかな、そして朗らかな風景が見受けられました。

そして朝食もお正月のご馳走等を出してくれ、心ゆれしく感ぜられた。

その後、遙拜式あり、一行も參列、唸々と響きわたる君が代、それにつゞき天地も割れ、この聲日本にも屆けと許りに萬歳を三唱しました。

つゞいて〇〇〇隊本部、虬江路、鐵路管理局、北停車場、寶山路、商務印書館、軍司令部、市政府等に行きました。鐵路管理局、北停車場、商務印書館等に行つた時に、皇軍の空爆の確實さと、偉大さに驚きました。鐵路管理局等はすぐその脇が租界であつた爲この空爆は多大の苦心と努力をはらつたと云つて居ました。

そして窓には大きな穴がいくつもあいて居て、これが空爆のあとと聞いて、全くおどろきました。又北停車場の如きは屋根がすつぽりと拔かれ、空爆の力の偉大なることに驚歎せざるを得ませんでした。

次に市政府に行つた時に、巨萬の財寶をほしいまゝに豪華と華麗を誇る上海市政府も今はそのあと形もなく、たゞ色とりどりに飾られた周圍の壁や、屋根のかはらだけが綺麗な位でした。然しそれでさへ、白い彈丸のあとや砲彈で拔かれた穴等で一杯です。

中には何處を向いても落書があるのにはおどろきました。殆どどこでもと云つた位に落書があり、之はひとり日本の國民の缺點ださうで、つくづく慨嘆しました。

次の日一月二日、公平路（クンピンロ）、平涼路（ピンリヤンロ）をとほり、兵站病院、飛行場、臨時俘虜收容場、江灣大競馬場等に見學並に慰問に赴きました。兵站病院慰問の時は各組に別れ、各部室に行きましたが、こゝで最も感じた事は或る部屋の患者さんは、看護婦に肩を支へられ、しつかりなさいと勵まされ、青白い顏にも一面によろこびを見せ、患者さんも、看護婦さんも、皆泣いてゐた。慰問の私達も感激し、感慨無量なるものがありました。

俘虜收容所に行きました時、驚いた事は豫想とは全く異なつて居ました。どうせ支那人の事故、不清潔で、規則等と云つたものもなく、だらしない生活をしてる事と思つて居ました。然しそこには紙屑一つ所か、ほこりさへ見えず、又日本兵が行くと班長らしきものが號令をかけると直立不動の姿勢を執り、手一つさへ動かすものもなく皆正しく敬禮しその前を通る私達もなんだか氣恥しくなりました。

江灣の競馬場に行きました時、有名な高い時計臺も、吾が海軍の見事な艦砲射擊によつて遠くはなれた所から砲擊するのに悉く命中したと聞いて全く驚きました。

次の日一月三日、晉にきく堅壘、大場鎭の戰跡、蘇州河渡戰地地帶等の戰跡を見學しました。

こゝで、私達は支那軍の堅固な陣地におどろくと同時に、之を破る皇軍の强さに感歎しました。トーチカ、クリーク、塹壕等、何如に皇軍をなやましたか、こゝに行くと一目で分りました。

又、蘇州河の渡河戰地帶の最も激烈を極めた所に行き、先づおどろいた事は、支那兵の死屍累々とし、たふれて居る事でした。附近は臭氣紛々として見る目も見られぬ慘じめな樣でした。

かへりに、又、長崎港について眼前に廣がる和やかな日本の風景を見た時、東海道線にて銀の衣も旭光に燦としてまばゆき許りに輝く靈峰富士の姿見た時、なんとも云ひ知れぬ嚴そかな、そして神の國日本と云つた感じがしてなりませんでした。

必らず勝たねばならぬ

林　與壽郎

支那の民衆を見た時、私は此れが日本の國民で有つたらどうであらうと考へ大日本帝國の有難さを感謝致しました。支那四億の民衆は、今は路頭に迷つた犬の様なみぢめな有様です。

或る者は殺され又家や畠を取り上げられて可愛想であります。此の國民が安心して生活して行くにはどうしたらよいでせう。それは四億民衆を抗日侮日排日の悪夢よりさまし平和なる支那を建設させる事であります。其の新しい支那を建設させるのは大日本帝國の重大なる任務では無いでせうか、支那民族は我々大和民族の親戚であると同時に此の親戚たる支那を善道に導びいて行くのは我々大日本の少年少女、第二の國民ではないでせうか。

長谷川司令長官、松井上海方面最高指揮官の言はれました様に「君達少年少女は身體を丈夫にして來るべき第二の大日本帝國を建設するに備へなければならない」此の言葉をよく我々少年少女は頭の中にしつかり入れなければならないと思ひます。

日本兵の強いのは武器が有るから強いのではなく昔からの武士道が日本人に有るからであります。何んな科學の進歩した武器でも最後は此の武士道、すなはち大和魂が肉彈となつて現れます。戰地の日本兵は故なく支那兵を殺さぬと言つております。支那兵の大部分は何の爲に戰爭をしてゐるか解からんのであります。日本兵は支那の善良なる民衆を討つのでなく後に居る悪い抗日、侮日、排日等をあやつる赤い支那軍閥を討つ爲なのであります。

大日本帝國は正義なくして劍は執りません。お正月のおかざりに機關銃、小銃、軍刀等の武器を祭壇にかざり、おそなへ物を置き、燈火を立てゝ兵隊さんは武器に對し感謝を致しておりました。

私は此の情景を見た時涙が出てしまひ大和魂があるから大日本の兵隊さんが強いのだと確認致しました。

我々は上海の兵隊さん方が言はれた「どんな事が有つても負けてはならん、必らず勝たねばならぬ」と言ふ事を確かり頭に入れ、命を天皇陛下に捧げ、東洋平和、世界平和の爲盡さねばならない。

○○飛行場訪問記

川村次郎

一月二日伊佐部隊の慰問を了へた僕達一行は、海軍飛行場訪問に向つた。團長を先頭にして、しばらく軍工路の凸凹路を歩いてゆくと後からトラックを運轉して來た陸戰隊の水兵さんに車上から大聲で尋ねられた。

「君達は何處へ行くんだね。」

「○○飛行場です。」

「それは都合がよい。自分も其處に行くのだから御乘りなさい。」

「それは有難い。おーい皆んな乘せていたゞかう。」

といふ様な譯でトラックに乘り込んだ。

あたりは見渡す限りの綿畠である。冬の最中の事とて、枯れ果てゝは居るものゝそれでも膝位の高さはあるだらう。所々に楊柳が立つてゐる。トラックは細いクリークに沿うて一本道を進む。綿畠の中には所々土饅頭が見える。草に覆はれた一寸した小丘の様な土饅頭は遠くからでもはつきりそれと解つた。

やがて飛行機のエンヂンの囂々たる爆音が響て來た。いよ〳〵飛行場に近付いた事が感ぜられる。右手に飛行場が現はれて來る。トラックを降りて水兵さんに御禮を云つてから、飛行場を右に見てグチヤグチヤの粘土質の道を徐行して飛行場の門へ着いた。門と云つても名ばかりの門で衞兵が一人立つてゐた。

飛行場に入つて一驚した事には、滑走路がグチヤグチヤで、今まで歩いて來た道と少しも變らない、そして又非常に狹く、內地のあの廣々した飛行場を想像してはならない。

此の飛行場は軍夫の人達が、命を的に敵前彈丸雨飛の中で、作つた爲に唯ゴルフ場を改造しただけだと云ふ事だから別に特殊の工事をしなかつた爲なのであらう。

三木航空司令に御挨拶をしてから、副官に飛行場を案內して頂く、飛行場には最新式の飛行機がずらりと並んでゐる。

中にはエンヂンを廻轉させてゐるのもある。又爆音高らかに飛び出して行くのもある。

飛び上つた飛行機に向つて手を振ると、機上からも手を振つてゐるが、瞬く間に何處にか飛び去つてしまふ。

飛行場には格納庫が無い爲に多數の飛行機が、覆ひを掛けたまゝ外に出してある。僕が

「此の様な所に着陸するのには隨分難しいでせうね。」

と尋ねると

「最初は、ぬかるみでこまつたが、今は皆馴れてしまつて、平氣で着陸出來る様になりました。」

と話して下さつた。

飛行場の所には土囊が築いてあつて、何時でも敵機よ來れと云つた様子であつた。

飛行場の見學を了へて再び舍內に入つてお茶やサイダーの御馳走になつたが、かへつて慰問に行つて慰問されてしまつた、この時に僕は航空隊の人達に

「爆擊に行つて歸へつて來ると疲れるでせう。」

と尋ねると、

「うん、歸へつて來ると腹は空くし、眠くはあるし、實に疲れるが、それが飛行場に着陸すると同時に始まるから不思議だ。」

と云つて居られたが、航空隊の人達が飛行機に乘つてゐる時には精神が如何に緊張してゐるかが判る。

內地の飛行場を見た事のある人は其の廣々とした、そして地面が固く固められてゐる事に氣が付いたであらうが、此の飛行場は實に滑走路は泥濘なのだ、飛行機の車輪のあとは深く縱橫についてゐるのだが、それは初めて着陸して來る飛行機を見てシヤベルを握りながら男泣きに泣いた軍夫の人達の苦勞を偲ぶのにふさはしい飛行場だ。

又航空隊の人達の苦心も實に大なるものがあるであらうと感ぜざるを得なかつた。

今事變に於ても實に航空隊の活躍は目覺しい、若し中支方面の制空權が支那の空軍に握られてしまつたらば內地の東京や大阪等も空襲を受け、上海の街の様に燒野原と化してしまつたであらうが、我が海軍航空隊の人達の御蔭で中支方面の制空權は完全に我が軍に握られた爲に東京も空襲を受けなかつたが、其の裏にはあの狹隘な泥濘の飛行場を基地として、每日飛行する航空隊の人達の御苦心が籠つてゐるのである。

又海軍の航空隊の人達に掛つては歐洲大戰の時の空中戰士として有名なギヌメ。リヒトフオーフエン。インメルマン等は問題にならないらしい。此の優秀な操縱術を持つてゐるから、此の様な泥濘の飛行場にも平氣で着陸が出來るのであらう。此の様に不斷から如何なる高等飛行も、如何なる所でも發着出來る様に腕を磨て來られた航空隊の人達に何んと感謝してよいであらうか。

又每日敵の軍事機關を爆擊に行かれる人達も大變な御苦心があるのではないであらうか。

エンヂンが最高の Efficiency を發するのは○○○米位であるが、○○○

米より約〇〇位迄一直線に急降下をして爆彈を投下する急降下爆擊は命中率が非常に良いが、之も必ず投下した爆彈を目標に命中させるには、この急降下爆擊でさへも不斷から何回も何回も行ふたゆまざる不斷の訓練の結果であらう。

僕達健兒の團歌の中にも「準備ぞ固き」と云ふ言葉があるが、此の航空隊の人達に負けない樣に、なほ一層何事にも準備よくし「備へよ常に」でなければならぬ。

又爆彈を投下して一轉垂直上昇にうつる一瞬には塔乘者は Wing の Shock を受ける爲に頭の血が一遍に下がつてしまつて腦貧血を一時に起すさうであるが、この樣に非常に苦しい急降下爆擊、又敵の頭上に一直線に降りる爲に、地上からの射擊の照準は非常に易しい爲に犧牲の多い急降下爆擊までもして投下した爆彈を目標に的中させる。航空隊の人達の攻擊精神の旺盛なのには敬服し又敢然として困難に當る其の精神は「笑つて困難に當る」と云ふ僕達健兒の「おきて」と同じである。

健兒精神を發揮したならば、常に何處に於てもお役に立つと云ふ事を一層深く感じ、ます〳〵健兒道に精進し、健兒精神を磨かねばならないと感じた。

以上の樣な事を感じ、〇〇飛行場を辭し、三木司令の御好意により再びトラツクに乘り虬江碼頭の敵前上陸の跡を見學に向つた。

光榮！ 感激！

田村 稔

上海方面皇軍慰問團に參加させて頂いたことは僕一生の光榮であり感激である。

長崎で全員揃つて結團式をした時は、いよ〳〵本格的になつたなあと緊張した氣分になつた。

翌日長崎丸船上の人となつて港を離れた時は生れて始めて海外へ渡航するんだと天にも昇る樣な爽快な愉悅と、未だ見知らぬ土地、しかも戰塵の跡を見舞ふのだと云ふ何とも云へぬ感情が湧いて來た。

一行の父であり、兄である團長始め幹部の方々の細心の注意と御指導によつて、全國から集まつた盟友諸兄姉と恰も一家團欒の旅行の樣に氣安く行を共にし得たことは全く幸であつた。

先づ上海に上陸して目を驚かしたものは、我が皇軍の威力が如何に强大なものであるかと云ふことだ。戰跡を見學して感じた事は正しきもの丶强さだ。

頑迷な國民政府の軍閥共が永い年月莫大の軍費を浪費して作つたと云ふトーチカも塹壕も正義の軍の前には抗し得ずメチヤ〳〵にやられて居る。天罰を受けた殘骸が眼界を覆つて居る。

「い丶氣味だ！ ざまを見ろ！」と大きな聲で云つて見たい樣な氣もしたが、又氣の毒の樣な氣もした。

蘇州河畔に於ける支那軍の少年兵の戰死の跡を見た。彼等年少の若人は正しき指導者を得ざりし爲に、あたら前途ある命を犬死さし、屍を野良犬の餌にするとは情けない限りだ。

僕等は皇軍慰問に行つた爲に海軍では長谷川司令長官閣下に、陸軍では松井最高指揮官閣下に御引見の光榮を得て、御鄭重なる御言葉や數々の御教訓を頂き、尙其上に軍から宿舍、寢食の御世話を受けて、全く心から感謝いたして居ります。

何と云つても僕が一番嬉しかつたことは、自分の學校の先生、山口工兵少尉殿に面會出來たことだつた。僕よりも先生の方が飛付いて、抱へんばかりに喜ばれた。あの感激は一生忘れる事は出來ない。しかも僕等が上海の阜頭を離れる時先生には此の日上海を立つて奧地〇〇へ進發する寸暇をさいて見送りにわざ〳〵來られた事だ。其の他兵隊さん達の純情で朗らかで親切であることをしみ〴〵感じた。

世界一の幸福

島田太郎

第一には僕達が此の世界無比の日本國民に生れた事の有難さをしみじみ感じた事でした。上海に上陸すると共に戰爭による悲慘な狀態を目のあたり見て、而かも其の慘狀が僕等の想像以上で、如何に激戰であつたかを思はせられ、更に日本軍に歸順した支那人が吾々日本人と行き交ふ毎に、非常に丁寧な挨拶をする樣をまざ〳〵と見てつく〴〵、

『戰勝國でありたい』

『よくも我々は日本の國民として生れて來たものだつた。眞に世界一の幸福者だ』

と日本に對し心から感謝したのでした。

第二には支那の抗日意識の如何に根强いものであつたか、如何に早くから對日抗戰と云ふ事に用意をして居たかと云ふ事に驚かれました。

皆さんも御承知の通り支那には立派な要塞や、砲臺、飛行場も澤山ある事や、歐米諸國から買ひ入れた新兵器が充分に揃つて居た事は勿論でありますが、今度の戰爭で一番日本軍を惱ました最も重要な役割を持つトーチカが到る處に在る事で、無論誰が見ても一目でトーチカだと云ふ事のわかるのも澤山ありましたが、更にもつともつと著るしい事は何人も氣の附かない處にかくれたトーチカのある事でありました。

かくれたトーチカと云つても山影や土堤の影にあるのではありません。或る大學の正門の土臺や、或る街の四つ角の商店や……外形はなんでもない建物が、一度外側が破壞されると中から立派なトーチカが出て來ると云つた樣な仕掛けになつて居ました。

殊に或るトーチカの如きは內部の設備は實に完全なもので、食堂や誤樂室が立派に出來て居りました。又大部分の市內大學、競馬場は何れも優秀な飛行場になる樣になつて居り、完全な軍事機關であると想像されました。

此んな工合で支那が如何に日本と戰ふ事を覺悟して準備に吸々として居たか只驚く外はありませんでした。

第三には一生忘れる事の出來ない光榮に浴した事であります。

皇軍の神業の樣な速い戰鬪は如何に軍主腦部が御忙しいかが思はれまして、恐らく御目にかゝれないと思つて居た長谷川第三艦隊司令長官にも、大河內陸戰隊司令官にて御目にかかる事が出來、慈愛のこもつた御訓示をいただき、長谷川司令長官とは出雲艦上で記念撮影までしていたゞきました。

殊に嬉しかつた事は最も記念すべき元旦に特に〻〻上海方面皇軍の最高指揮官たる松井閣下に御目にかゝれた事でした。閣下は一寸のひまも無い御忙しい中を殊更に時間をさいてお會ひ下さいました。

御出になつた時は涙をボロ〳〵出して、「子供でありながらよく來てくれた」と涙と共に御訓し下さいました。あの時の有樣を思ひ浮べますと今でも涙が出さうになります。

僕等は閣下の御訓しを一生の羅針盤として、ます〳〵健兒道に精進する積りで居ります。

感激に戰く

井辻憲一

全般的に亘つて言へば、先づ上海に於ける事變後の躍進日本の姿を充分に認め得て、うれしく思つた。例へば戰場の跡かたづけの十分でない市中

に、武裝物々しい兵が立つて居るといふ狀況の中にあつて、支那商店は未だ開店してゐないのにもかゝはらず、邦人商店は活氣よく營業を始めてゐた。又多くの諸機關も既に活動を始めてゐた。又日本の商船も堂々繁く往來してゐた。此等の事柄に依り、大體前の樣に感じた。それと同時に又日本が上海に以前よりもつと〳〵發展する可能性が確かに有ると思つた。

さて、今より見學並に慰問をした事についての感想所見を述べよう。

最初長崎丸から、港に上陸するまでに、上海の日本人少年團の方が我々を迎へに來て下さつてゐた。上陸第一歩に於て、此一事の如く御好意を寄せられてゐたのである。その後ずつと各方面を慰問、或は見學するに當つて誠に親身も及ばざる御厚情を頂き、猶且御指導下された事に對して、私は大へん有難く、御禮の申し上げやうもない程感激した。

次に下船後、支那全沿海に堂々威力を表した第三艦隊の旗艦「出雲」を訪問した時の印象も未だ頭の底に殘つてゐる。同艦隊司令長官長谷川中將閣下にお目にかゝり、共に記念寫眞をとることが出來た。此の喜び、此の感激、一生忘れることの出來ぬことである。

市内を通つた時、英人の住んでゐる家と道路一つ距てた支那軍の陣地は完全に破壞されてゐるのにもかゝはらず、英人の家は何等損害を受けてゐないといふことは、誠に我が軍の第三國をどこまでも尊重するといふ聲明の如く、立派にその權益を傷めぬばかりか、かへつてこれを保護してゐると言ふ事實を目擊しては、日本軍の尊さ偉大さに深く感じた。

そしてそれをするためには非常な苦心をし、又犧牲を出した事に思ひ及ぶと、益々感を深くせざるを得なかつた。又我が軍の射擊率の確實なことにも驚歎した。それに反して、支那は我が厚意を無視し、赤魔と蔣介石に躍らされて、無茶苦茶に我に抵抗し、其の間、第三國の權益を破損せしめ、又その射擊の命中率の惡い事は夥しい。

第一日に八字橋・廣中路へ行つた時、塹壕、トーチカ、クリーク等の附近に敵兵の白骨がばらばらになつて散亂してゐた。これを見て始めは少し恐しかつたが、後で馴れたのか何も感じなくなつた。しかしその一つの白骨、それもやはり一人の人間であつて、その靈は如何に思つてゐるであらうか。敵と雖も戰死した勇士である。徵發されて、何も事の善惡をしらず、銃をとつて、露と消えた憐れな勇士である。それにくらべてわが帝國軍人は堂々正義の爲に戰ひ、戰死を無上の光榮と爲し、喜び勇んでこれに死す。餘りにもかけはなれたる軍人ではないか。故に私はかく思つた。

「我々日本國民は幸福である。」と。

激戰地も徒歩で行つた時、その一歩々々踏み出す足先がふるへた樣に思つた。この自分がふむ地は我が勇士の一人の末期の所ではあるまいか。忠勇なる我が將士の血がかたまつて著いてゐるのではあるまいか。これを思ふ時、目頭が熱くなり、踏みだした足が何か惡物の樣に思へ、「この貴い地をふんでよいか。」といふ樣なことまで心に浮び出た程であつた。

又あたりには衣服、食器、手榴彈、砲彈の破片、小銃彈等が無數にちらばつてゐた。此等によつて如何に支那軍が抵抗して、戰が激烈であつたかは、推して知ることが出來る。そして一つの陣地をとるにしても、どれ程の血を流し、如何程の苦心をしたかといふ事がよく窺はれた。そして深く我が兵に感謝せずには居られなかつた。

一月一日。我が大帝國の鮮かしい意義深い迎春であつた。戰雲未だ完全に收まらぬこの地に於て、忠勇なる陸戰隊の兵士方と共に新年を迎へ得たこの喜び。私の一生の中で恐らく最も意義あるうれしい正月であるであらう。此の朝、陸戰隊の兵隊さん方と共に拜賀式に參列した感激も亦忘れらない。朝の氣をついて、嚮喨たる喇叭の響。大上海の東空に燦然と輝き上る旭日。我が日本の前途を祝福するかの樣に。そして皇居を遙拜。兵隊さん達も亦私等も感慨無量であつた。

鐵路管理局を見學した時、建物は散々破壞され、破片四邊に飛び、無慘な形骸を留めてゐた。又爆彈降下の爲に大穴があいてゐた。これにより、支那軍は日清戰爭時代の所謂「チヤンコロ」の風は見えず、頑强に抵抗し、最後まで戰つた跡がある。この支那兵を攻める日本兵は、はかり知れぬ程の大なる偉力を持つてゐることが忘れられなかつた。この樣な事は日

本軍にのみ爲される事柄であつて、他國の眞似の出來ぬ所であると思つた。

一月二日に兵站病院を慰問した私達は慰問品を持つて、一人々々病室を御慰問した。身の不自由を無理して起し、厚く御禮を述べられた白衣の勇士の眼は、何時しかうるほひに閉されてゐた。實際私等少年に慰問してもらふといふことは、兵隊さんたちにとつて、誠に嬉しいらしい。何邊も何邊も御禮を云はれるので、こちらも目頭の熱くなるのを感じた。白衣の勇士に別れを告げ、航空隊を御慰問した。見學後、一室へ通され、茶、サイダー等を頂いた。私は茫然とした。かへつてこちらが慰問されてゐる形である。

大場鎭へ見學に行つた時の事である、竹藪の中等に塹壕が長々と續き、幾段にもなつてゐて、我々はそれを展望した。一つの農家の樣な所に支那の棺桶がおいてあつた。ふたがとつてあつて、支那人の死體が這入つてゐて朽ちてゐた。これを見て、私は日本人は幸福だとつく〴〵思つた。自國兵に荒されて、死んだものゝ魂は如何に思つてゐるであらうか。日本には斷じて此の樣な事はないと思つた。

それからトラックで蘇州河畔を經て敵の死體の多くころがつてゐる所で下車した。そして田中大尉殿の御案内で見て廻つた。塹壕の内外等に死んだまゝの武裝した姿で斃れてゐた。風雨にさらされて肉はくさつてこげ茶色になり白骨化してゐる所もあり、中には少年や女の死體も混つてゐた。前と同樣日本軍人の幸福さに比して、支那軍人の餘りにも不幸なることを憐んだ。

市中見學の時、何か買はうと思つても、繪葉書等は全部日本製であつてその他の物にも日本製のものが多くあつた。こゝに於て又躍進目覺しき日本を見た。

次に私等が泊つてゐた宿舍に居られる陸戰隊の兵隊さんたちは僕等が來たのを大へん懐しく思はれ、まるで弟に會つた樣な氣がすると言つて居られた人もあつた。又同鄕の人を求めては自分の室に呼んで、自分等がもらつた慰問袋を分けて下さつたり、色々な實戰談等を聞かせて下さつたりした。そして大さう懐しげに手紙を託され、

「何か言傳でも御座居ませんか。」

と聞くと、

「そんなものはない。只元氣で御國の爲に働いてゐるとだけ傳へてくれ。」

と言はれるばかりである。この言葉には私は大へん感激した。肉親の弟達にも勝るとも思はれる樣な待遇をして頂いて私等は御禮を申す言葉をもしらなかつた。

自分の特に感じたこと

山下　健

それは戰には敗けるなと云ふ事です。

もしも戰に敗けたならばどうなるか。大きな家を持つて居ても其れに入る事が出來ず、多くのお金を持つて居ても其れを用ひる事が出來ず、自分が今持つてゐるだけで、あちらへ行つたりこちらへ行つたり、うろ〳〵して逃げ廻り、又食物を賣つて呉れる家も無く、終には死なねばならない。

どんなに寒くても入る家はなく、どんなに食べたくても食べる物もなく、たゞ死を待つのみである。今支那は其の運命に有るのである。

實に戰に敗けると云ふ事は悲慘なことです。しかし支那人は情のある日本軍と戰つてゐるからそんなに悲慘な目にもあつてはゐませんが、自分は日本人として生れて來たことを悲常に喜んで居ます。

自分は慰問に行く前からよく慰問袋を送つて居ましたが、此度、夢にも思はなかつた皇軍慰問團に選ばれて、親しく皇軍の皆樣を慰問することができて、涙の出るほど嬉しく思つてゐます。

上海に行つて元氣な兵隊樣達の顏を見ると非常に力强く思ひました。又

名譽の負傷をされた白衣の勇士の再び戰線に立たうと云ふ力强い顏を見て自然に感謝の涙が出ました。

上海の現地に行つて兵隊樣達の御苦勞を思ふと、僕達は一層銃後の護りを固めて兵隊樣達に滿足していたゞくやう努力せねばならぬと思ひます。

日本魂のあらはれ

奥出重吉

大日本少年團聯盟から上海方面皇軍慰問使節の發表を見た時、私の心は躍りました。そして是非名譽ある人員の中に選ばれる幸運を神樣にお祈り致しました。

しかるに、はからずもその一員に選らばれたといふ通知を頂いた時、私の心は、最上の幸福の喜びに充ち溢れ、感激にふるえました。

出發の日。

大阪驛頭には大阪代表、山下君と私の見送りで健兒團關係の人や健兒團の人々が、手に〳〵日の丸の旗や團旗を持つて來て居られるのを見て今までにない涙の出る樣な感激をおぼえました。汽車出發の時の大阪驛頭の彌榮の聲を聽いて大阪を代表して、よく使命を果してくるぞと心にちかつたのです。

樣々な感情をのせて汽車は、すべり出しました。私の心の中を走るのは「どうして第一線に立つて御國の爲に働いて下さる將兵の方を、お慰めしやうか」といふ事です。私達の爲に戰の鋒をとつて下さる將兵方々にはどんな事をして上げてもまだ足りないと思ひました。

玄海の荒海をけつて、上海に第一歩を印しました時、豫想して居たより暖いのに驚き、想像以上の慘狀に思はず目をそむけました。廢墟の樣になつた街の有樣を目のあたりに見て、もし日本の國がこんな風な慘な有樣になつたら私達はどうなるのだらうと思ひました。我々は立派な、お國に生れ、有難い　天皇陛下を頂いて居ればこそかうした悲慘な目にあはず、この上海に皇軍を御慰問する光榮の此の日があつたのです。廢墟の街に立つて立派な國に生れた事の幸福に心からの感謝を致しました。

大場鎭から蘇州河畔、南市への道では、今まで、夢にだに想像した事のない樣々な有樣を見せつけられました。

支那兵が無慘な死體となつて折重なつてゐる姿、此處が支那の大都として誇る街とは思れぬ程に荒れはてた街々、此の慘狀を見る度に、思ふには、敗戰國の悲慘な樣を痛感し、戰には、決して負けてはならぬ、あくまでも勝たなければならぬ、と思ひました。

その道中において中華民國勇士の墓と書いてある墓標を見て、不思議な感じにうたれた。負けた國がかうして、なくなつた勇士を、ほうむるのかと思つて、案内して下さつた兵隊さんに、うけたまはつたところ、それはあまり、支那兵があはれなので一つしよにかためて、日本の兵隊さんが墓標を建てたのだといふことをしつて、日本の兵隊さんは、さすがに强いばかりでなく、又、情をも深い事に、今さらながら感心致しました。全く日本魂の美しいあらはれであると大變喜しく思つたのです。

かうした感想をいだきつゝ、日本に生れ出た幸福に限りない喜びをいだき一層第二の國民として、第二の國家を背負つて立つべく努力邁進せねばならぬと思ひました。

尊き犧牲

今西福藏

舊臘二十九日盛なる激勵の言葉國歌の齊唱される中に出帆し、船中無事に三十日午前九時頃支那大陸を水平線のかなたに眺めた時、初めて異國を眺めた時自分は日本人である、健兒である。上海に上陸したならば健兒として、日本人として恥しからぬ行動をとらねばならないと固く〳〵誓つたのであります。

日本海軍が黃波を蹴つて、怒濤と戰ひながら此の渺々たる海岸線を警備してゐて下さる御苦心のいかに切なるかを、つく〴〵感じ、皇軍の武運長久を祈らないでは居られませんでした。

三時頃船は黃浦江上を滑つて、上海日本郵船會社中碼頭に横着けされました。

事變發生當時多數の犧牲者を出しながら寡兵よく大軍を打破つた陸戰隊の御苦勞やいかばりであつたらうか。今でこそ何の心配も無く樂々と上陸することが出來るが當時對岸の敵砲兵陣地から打出す彈丸雨霰と降る中に沈着よく事を處理した將兵並びに在留邦人方の御活躍には、まつたく敬服の外なく、感謝の二字以外に御禮の言葉もありません。

上陸以來、戰跡や病院其の他各方面を視察、御慰問に參りましたが、最も强く私の胸を打つたことを申し上げてみます。

三十日上海に上陸致しまして市中を行進してゐた時に兵隊さんと、往き合ふとトラツクの上からも、ハイヤーの中からも、或は車を止めてまでも萬歲を叫び合ふ。誰れの指揮なくとも諸手を上げて萬歲を叫ぶ。これ日本人なればこそであります。異國に來て皇軍の將兵を見た時の心强さは內地に居りましては到底味ふことの出來ないことであります。

又宿舍に着いた時の中隊長以下の水兵さん方が吾々を非常に歡迎され歡待して下さつたことであります。例へば吾々の爲に立派な部屋を貸與して下さつたこと、每日〳〵晝夜の別なく水兵さん方が吾々の部屋に來られたり、吾々を各自の部屋に呼んで下さつて、色々實戰談等をして下さつたことであります。

又三十一日には年越そばを、元旦にはお雜煮を、御馳走して下さいました。吾々は戰地に於て內地に居る如く、年越そばや、お雜煮を戴かうとは夢にも思ひませんでした。こられの事を見ても兵隊さんが、いかに吾々を歡待して下さつたかがよく伺はれ其の御好意にはなんと御禮を言つてよいかわかりません。斯の如く吾々は慰問に參りましたのに、かへつて慰問された樣なことも屢々あり恥しく思ひました。

昭和十三年一月一日陸戰隊の宮城遙拜式に參列しましたことであります。朝の澄みきつた空氣を破つて嚠喨と響くラツパの音。異國の空より遙かに宮城遙拜を致した時には目頭が熱くなり涙のにじみ出るのをどうすることも出來ませんでした。此の時ほど心の奥底にまで感銘したことはありませんでした。私は十三年のお正月を一生涯忘れることが出來ないでせう。この時の氣分を口や筆に表はされないのが殘念です。私共日本人に生れましたことをしみ〴〵感謝せずにはゐられません。

次は一月二日に參りました兵站病院であります。四つの病舍に收宿されてゐる傷病者を御慰問に參りました時であります。案內の看護婦さんが吾々が慰問に來たことを各病室に傳へられますと、身體の不自由な人まで看護婦さんに助け起されて、吾々が御慰問の品物を差上げると、餘りの感激の爲め眼に涙を浮べながら、

「有難う。」

と言つて下さる、此の一言を戴き吾々も胸が迫つて何事も言ふことが出來ませんでした。御國の爲に勇躍奮戰中、名譽の戰傷を受けられた方々から御禮の御言葉を戴きまして、こちらの方が何とお慰めの言葉を述べてよいか、わかりませんでした。各室を辭する時に

「では御大切に。一日も早くお平癒になつて、再び第一線に活躍せられん日の一日も早からんことを祈つてをります。」

と言ふと、全部の方が「有難う。きつとよくなつて、うんと働くから安心してくれ。」と頬をぬらしながら答へて下さつた時には、こらへきれず涙が頬を傳ひました。

又いよ〳〵病氣が重くなつて、內地に送還されると定つた時には、それらの戰傷者の方々は幾度も〳〵泣いて現地に踏み留まる樣に軍醫長に嘆願されるさうであります。此の話を看護兵の方から聞きました時に、

「ああ、兵隊さん有難う御座います。其の氣持で靜養して、一日も早く平癒して下さい。」

と祈らずには居られませんでした。

次は一月三日に參つた、大場鎭や蘇州河畔の激戰地跡を視察致しました時であります。

先づ大場鎭では其陣地の非常に巧妙な堅固であるのに驚嘆しました。竹藪を利用して塹壕をいたる所に掘つてあり處々にはトーチカも建てられ、前にはクリークあり、鐵條網が幾條にも張り巡らさせてあります。此の堅陣を造るのに支那軍はいかに苦心しただらう。又この堅陣を打破つた皇軍の苦心はお察しするに餘りあります。「死しては護國の鬼となる」とかねてより聞いて居ります。そのことを思ひますと日本に生れたことを感謝せずには居られません。然しこれらの陰には幾多尊い犧牲者のあることを忘れてはなりません。これらの方々には感謝の言葉もなく、唯冥福を祈らせて戴きました。

終りに、吾々は斯くの加く、いたる所皇軍に感謝することばかりでありました。

どうか吾々少年は、次の時代に立つべき少年は、皇軍がいかに御苦心をし、萬難を侵して、皇國の爲に日夜一瞬たりとも膺懲の手を弛めず、戰つてゐて下さる皇軍に對する感謝の念を一刻たりとも忘れることなく第二線を守らうではありませんか。幸ひ自分は「百聞一見にしかず」の諺の如く戰跡を視察することが出來ましたことを何より感謝せずには居られません。

我々健兒はます〳〵健兒道の爲に、世の爲に國の爲に盡くさうではありませんか。

感激の皇軍慰問行

金光國勢

此の度は全國少年少女を代表とする大日本少年團聯盟上海方面皇軍慰問團參加の光榮に浴し誠に感謝の至りであります。

日程はわずか七日間でありましたが、幾多の父兄が尊き血を流した戰跡の見學、又忠勇無雙にして盡忠報國の至誠に充ち〳〵た皇軍の皆樣を心から御慰問させていたゞいたことは私等の心に強い〳〵感銘を與へさせられました。

皇軍の皆樣には少年少女といふことで大變喜ばれ、感涙を以て迎へられたことは非常に嬉しかつた。

そして陸海軍の御厚情により松井上海方面最高指揮官閣下及び長谷川司令長官閣下竝に大河内特別陸戰隊司令官閣下にも御面會し、心から御慰問の言葉を述べたことは私等一生忘れ得ぬ記憶となりました。

又戰跡では我空軍の勇敢且つ正確なる爆擊の跡には感心させられました。それにひきかへて支那機の無茶苦茶の爆擊の跡にも驚かされました。

又縱橫無盡に構築してゐる大きな然も深いクリークと、堅固なそして大規模なトーチカ陣を利用し抵抗した頑敵を打破つた皇軍の勞苦が心から偉大であると思はれてなりませんでした。或る地方ではまだ生々しい支那兵の死體の轉がつてゐるのを見ましたが、私等は腦中に戰爭には絶對に勝たねばならぬと強く〳〵感じさせられました。

私等は此の幾多の父兄が流した血の礎石で見事築き上げた東洋平和の金字塔たる明朗化途上の上海をこれから導いて行くのは、全く明日の日本を背負つて立つ我等第二國民の任務であると腦裡に深く〳〵きざみ込まれました。

慰問の喜び

須唐晴男

上海方面に皇軍慰問並びに戰跡見學の旅を續けるうち、私が最も强く感じた事は「戰ひには斷乎勝たねばならない」といふ事でありました。

我が皇軍が　陛下の爲にと生命をも投げ出して働いて下さるからこそ、我々は斯うして國内に無事に連戰連勝の報に接する事が出來るのであります。もしも我々が住む都市が、敵國空軍或ひは海軍に來犯され或ひは爆彈或ひは砲彈に見舞はれ、今日の上海の如くたゞきつけられたなら我々はどんな悲慘な眼にあはなければならないだらう。そして又蘇州河畔の死體の樣に我々も銃を執つて戰ひ、敵彈に殪れあんな無慘な姿にならうやも計り難い。と私達がかう想像するだに恐怖極りなきものがあります。

戰に敗れた者の慘めさ！

それは以上の樣に想像するだに、恐怖の極みである慘酷そのものであります。

我々も戰に敗れゝば、きつとこんな眼にあはなければならないでせう。だからこそ戰ふ以上如何なる犧牲を拂ふとも勝たなければならないのであります。私は負けたものゝ悲慘な結果を眼のあたりまざ〳〵と見せつけられて、つく〴〵かく痛感せざるを得なかつたのであります。

と共に、かくの如き連勝も、とりも直さず即ち忠勇無双の皇軍の御奮鬪の賜物であることをはつきりと印象し、その苦勞の程もこの眼、この耳でこま〴〵と、そして明瞭に見、又聞いて如何に大なるものがあるかといふことも私の頭に燒きつけられて、その勞を少しでも御慰めしたいと衷心より希望したのであります。

それとこの戰果が主として飛行機の爆彈と、そして迫擊砲彈に依るものである事と、その中でも飛行機の空襲程恐しいものはない、と聞かされて私は空襲に對する考へを改め、毎年の防空演習も、もつと改善されたいと思ひました。

僕の感想ですが、内地の防空演習等ではとても間にあはないと思ふ。特に燒夷彈なんかはとても恐しい事此の上ないさうであるから、もつと防空演習も心を入れて本腰になつてやらなければならないと痛く感ぜしめられました。

又嬉しかつた事は、我々の慰問に對して兵隊さん達が喜んで下さつて大變優遇されて下され、それが私達の想像を遙かに超えるものがあつた事であります。我々の第一の目的とする所は慰問であります。その我々の慰問を喜んで下さる、それ程我々にとつて嬉しく感ぜられるものはありません。そしてそれがとりもなほさず目的の達成にもなる事なので嬉しさは益々增すわけであります。何といつても旅行中最も嬉しかつたこととしてこの事をあげねばなりません。

一月三日

中野馨

七時起床。七時二十分今日も朝日うらゝかに昇り、皇軍の破竹の勢を物語るやう。

寒さはやゝ强い。冷霧をつき團杖を持つて校庭に集る。

體操、敎練をすまして食事に向ふ。此の日も海軍特有のお雜煮に、皆舌を鳴した。

十時田中陸軍工兵大尉の御案内に依り、大場鎭に向ふ。トラックは惡路を矢のやうに走る。四面は棉花畠で寒さうに縮む。

やがて大場鎭に着く。竹藪をぬつて行くと、その下は皆塹壕で四方に通

じてゐる。

少し行くと小高い丘に出る。こはいかに、その足下は塹壕で有り丘の上にはコンクリートのトーチカが有る。その周圍はクリークを廻らす。また鐵條網をこれまた廻らし、この堅固さには感服する。がよくも守りよくも攻めたと、兩軍の激戰を頭に幻の如く畫く。

毀れた家の間を通つてもとに歸る。十一時中山路を通り蘇州河に赴く。河は泥河にして前に鐵條網を張る。その後の家に入ると、これまたどうしたのだらう。

その家の中は鐵板とセメントで固めたトーチカ。そこから大場鎭同樣に四方八方に塹壕が通じてゐる。しかしよく日本軍が攻めて、この堅壘を陷したものと感歎させる。その後又トラツクで下流に赴けば支那軍の死體—あちらこちらに見受ける。あゝこの悲慘な樣、あはれな樣を眼前に見た僕は戰爭には絕對に勝たねばならぬ。負るとこんなになるぞ—。

戰には必らず勝てよ。我大日本。

中には十五六歲の少年が死んでゐるではないか。なんと氣の毒な樣ではないか。日本は負けたことがない幸福な國だ。もし日本の兵士だつたらどうだらう。負けたらこんなみじめの樣となるだらう。負けるな日本。非常時日本。決して戰爭には負けるな。

日本の兵士は支那軍の死體を塹壕の中に頭を北にして花を立てて懇に葬るが、支那軍は我が兵士の死體を見ると足で蹴るさうだ。なんといふ殘酷な支那兵だらう。聞けば支那軍は支那の良民にも午前四時から午前六時まで二時間程排日軍事教育をし、その教育を受けないと重い罰を受けるといふ程固い排日の教育を心に植ゑつけてゐる支那軍だ。

蔣は長期抗戰を叫んでゐる。何時まで續くかわからない戰爭だ。僕等は銃後の守りをしつかりと固めなければならない。

かういふことを思ふと胸が一ぱいになる。その後再びトラツクに乘り大山大尉遭難地を訪ひ、南市に入る。南市に入り川上部隊警備線を見學する。

隣はフランス租界である。そこを警備してゐる。フランス兵は僕をじつと見つめて口笛を吹いて悠々としてゐる。日本兵は僕等が敬禮をすると不動の姿勢を取り注目して答禮をする。また人々が通つても、自動車等が通つてもよく目を見張り、嚴重に自分の務に本分を盡してゐる。僕はこの規律正しい日本兵、勇敢でやさしい日本兵を見て、本當にうれしくたのもしく思はれた。それから日清汽船の沈沒された黃浦江岸に行く。

その後川上部隊を慰問して、午後四時半此處を出發し六時頃英租界に入り南京路の夜景を見る。さながら東京の銀座通りのやうで、畫のやうな明るさである。

人種もさながら世界展覽會で英國人、佛蘭西人、支那人、印度人がゐて建物も高いから海外に來た感が湧た。やがてガーデン・ブリツチを渡つて北部小學校に入る。

自分は今まで毎日見學したり、訪問したりしたが、今日程痛切に感じさせられたことはなかつた。僕等は支那の空で惡戰苦闘をせられて御國の爲に盡されてゐる兵隊さんに對して、僕等は第二の國民として銃後の守りを益々固くし、來るべき日の活躍を誓ひます。そして大日本帝國の礎を固め出征した兵隊さんに安心して戴かう。

大日本帝國、彌榮々々。

出征の兵隊さん、彌榮々々

日本に生れた喜び

國分正二

戰地に於ける皇軍の將士は私達が考へてゐたよりも、もつと〳〵多大な辛苦をなめて御國の爲に働いて居られます。今回目の前に我が皇軍の將士を慰問して參りまして一層私達銃後の者は固く手を握り合ひ、心を合せて此の非常時局を守つて行かなければならないといふ事を心の底に刻み付けられました。

皇軍の將士達はなつかしい日本から少年少女を代表して、わざ〳〵遠い上海まで慰問に來てくれたといつて非常に喜びました。これを見たゞけで異國まで慰問に來たのを非常に嬉しく思ひます。又將士達は非常に元氣で御國の爲に働いて居られますのを見まして安心致しました。

水、氣候の異つた異國にてどんなにかつらい事でせう。私達も陸戰隊の將士と寢食を共にしてしみ〴〵將士の苦勞を味あふ事が出來ました。

所々の戰跡をも見學致しまして、支那軍の堅固な陣地の構造には驚かなければなりません、と同時にこの樣な堅固な陣地を持つ支那軍を肉彈にておひ拂ふ我が皇軍の奮戰振りを想像する事が出來ます。

臨時俘虜收容所に行つて見ましても、私達がはづかしい程整頓整理が行屆いて居り、實に立派なものです。支那人とかチヤンコロとか言つて馬鹿にして居た私達は本當に支那あなどるべからずと感じました。

蘇州河畔の戰跡を見物致しまして、支那軍の死體がゴロ〳〵をころがつて居る中には未だ十八・九の少年も居り、もし私達が支那の國民であつたなら自分もこんな死方をして居たかも知れないと思つた時、世界に類のない大日本帝國の臣民と生れた事を本當に嬉しく思ひました。

戰はこれからだ

日暮瑞穗

三十日は來た。船は上海へ。

海の色が茶色になる頃から揚子江に入るのださうだ。

九時頃からそろ〳〵入つたらしい。右を見るとかすかに陸地らしいものが見られ左も亦同樣で海と變りない。

しばらくして黃浦江に入る。そこから兩岸の家々は或は屋根なく、窓ガラスなく、或は柱だけのもの、戰の後らしい一種の淋しい景色だ。

一時半埠頭に着く。上陸第一歩の感想は今まで感じた事のない悲しい樣な恐しい樣な變な感じだ。街を歩くにつれよく家がこはされ、燒かれてゐるのに驚く。軍艦出雲、日本總領事館、居留民團本部、陸海軍兩武官室を訪問した後、北部小學校に這入り、第一夜を迎ふ。

三十一日は上海神社參拜、此處は神の守りたまふ所か戰災をかうむつてゐない。

陸戰隊本部！　あの有名な陸戰隊本部、實に立派でどつしりして三方の敵をにらんでゐたのだ。陸戰隊病院を慰問してから八字橋へ向ふ途中、日本人墓地で、上海事變戰沒勇士の墓を拜する。丁度雨がしと〳〵と降り、戰死者の靈を弔ふやうである。

水電路附近では我軍が寡兵をもつてよく衆勢と戰つたかゞわかり戰死者に對しおのづから頭が下る。

一月一日昭和十三年のお正月を戰地で迎へた。

戰地のお正月は私達に何を敎へたか。それは、油斷してはならない、戰爭はこれからだ。常に緊張し努力せねばならぬといふことです。鐵路管理局、上海北站停車場に行き、日本の空軍の威力の大なるを知り驚嘆する。午後、松井最高指揮官訪問。市政府に到る。此處でも、又日本空軍の威力を知る。

二日は兵站病院を慰問、兵隊さんはどんなに私達が見舞に行つたので喜んで下さつたらう。

重傷の方も輕傷の方も皆涙を流して喜こんで下さつた。

僕達は來てよかつた。少しでも兵隊さんをお慰め出來れば疲れも寒さも何でもないのだ。

俘虜收容所に行く。人相の惡いのがたくさん立つてゐる。日本兵は俘虜になるのをどんなに恥とすることか。それで切腹する人さへゐるのに。だから支那は何時までも弱いのだ。

三日大場鎭、虹橋飛行場方面に行く。死骸をみてつく〴〵敗軍のあはれを知り石にかじりついても勝たなければならないと思ふ。

此の旅行は僕達少年の心に大なるものを與へた。

兵隊さんの話によると戰爭中は支那民族と戰ふのでなくして、支那軍閥と戰ふのだとのことでした。

僕の心に感じたことは、今東京等でやつてゐる防空演習では駄目だと思ふ。上海のコンクリートや煉瓦の家でさへめちや〳〵だ。まして木造建築にあの防空演習ではまだ〳〵考へる必要がある。

僕達第二の國民が支那を導く責任があるのだ。

東洋平和の爲に。

光榮と健兒の覺悟

道田信一郎

十二月三十日に長谷川司令長官閣下、三十一日には大河內司令官閣下、昭和十三年一月一日、松井最高指揮官閣下の御顏を拜した。三閣下からは「わざ〳〵遠い所をお訪ね下さいまして有難うございます。現地をよく御覽になつて、內地にお歸りになつたらよく此の樣子をお傳へ下さい。將兵一同にかはりまして、厚く御禮申し上げます。」

との御言葉をいたゞいた。少年團の訪問を御喜び下さつて僕等に强く目をかけて下さることは、日本少年の深く心に刻み込まねばならぬことだ。

此の光榮と名譽にあづかることの出來たのは一重に大日本少年團のお蔭であつて、普通の慰問團ではとても出來ない事である。

一月一日、閘北を見學した。敵の鐵道管理局は、道路一筋隔てゝ舊英租界の隣である。此の管理局目がけて爆擊、砲彈が確實に命中してゐる事には非常に驚いた。一發間違へば物言ひをつけようとかゝつてゐる某國を目前に控へて、よく確實に命中させたものだ。無敵荒鷲の技術の優秀さには今更ながら感心させられた。

見る物、聞く事、總て皇軍に對する感謝の事ばかりである。健兒一同が兵營を訪問致しますと、他の人々から贈られた僅の慰問品を健兒に分けて下さつて、恰も弟の如く可愛がつていたゞいた。此の兵隊さんの心をくんで、今後我々が大きくなつたならば、きつと皇國のためになる日本人となることができると思ひます。

今度の旅行で「敗戰國の慘めさは眼もあてられぬ」と最も强く感じた。戰跡、市中見學の度に總てが皇軍の勢力下に置かれてゐるではないか。ガーデン・ブリッヂの如きは、日本人、日本側の自動車は悠々通ることが出來るに反して、支那人は自分の國であるにかゝはらず、一人〳〵皇軍の兵士より調べられて、通行を許されてゐる有樣である。戰には常に勝たなければならないことを痛感した。

皇軍が東洋平和の爲に苦戰を冒して戰つて下さつたのだから、僕等も早く大きくなつて、東亞平和の爲に力を盡さうと固く決心した。

日本萬歲！

加藤兼雄

上海に着いて先づ愉快な事は日本の飛行機が二三機船の上空に現れた時のその愉快な氣持つたら、なんといつてよいかわかりません。

又黃浦江を壓する如く、黃浦江に堂々と浮んでゐる軍艦出雲を見た時日本の有難さがつくづくわかりました。

それから市中に入つて印度人が僕達に先に手をふつてくれた事です。これは印度人は日本がすきだといふ事から起るのだと思ひました。

又市內をトラックで走つて居ると、兵隊さんがみんな萬歲を叫んでよろこんで居た事です。これらの事が僕の思つた愉快な事です。

それから僕の深く感じた事は陸戰隊附屬病院と、伊佐部隊病院の二つです。病室へ入るとみんな感激して泣いて居りました。それから傷病者が橫須賀はおらんか、東京はおらんか、靜岡はおらんかとみんなが僕等にしたしみを持つていつて呉れる事です。

さうしてもし橫須賀の兵隊さんだとすると、すぐおまへは何町だとか、いろ〳〵の事をいつて橫須賀へ歸つたやうによろこんで居られた事です。

又陸軍武官室へ行つた時、○○大佐はお話を途中でやめられたのかと思つたら泣けてお話がつゞかないやうな有樣でした。僕もその時は泣けて來ました。そして遠く上海へ來たかひがあるとつくづく思ひました。

どこへ行つても兵隊さんは僕等をかわいがつて呉れた事です。

僕等の泊つて居た日本人北部小學校に居つた兵隊さんは僕等が慰問から歸つて來て部屋を訪ねると、自分たちの慰問袋に入つて居たお菓子やいろいろの物をだしてたべさして呉れました。最後には砂糖などを內地へもつてかへれと角砂糖などを呉れた兵隊さんもありまして感きはまつて何もいへませんでした。

又市中で兵隊さんに會つて慰問文をくばりますと、兵隊さんは子供のやうに奪ひあつて、その慰問文を大事にポケットにしまつて、うれしさうにこと〳〵としてゐました。

空爆の跡を見て空襲の恐しさを知り、もし敵の飛行機が來たら、そこいら中が燒野ケ原になるといふ事を覺悟しなければならないと思ひました。

最後に私は初めて海外へ行きましたが、日本をはなれてはじめて日本の有難さ、貴さ、又父母の有難さ、兄弟の有難さがしみじみわかりました。

日本へ歸つて來てから、みんなと別れるかと思ふと泣けて〳〵しやうが有りませんでした。

日本人の誇りと喜び

三島謹子

第一印象

『ボーツ』と汽笛が鳴つて船はぴたりと波止場へ橫付けになると、同時に私は曾つて戰亂の巷であつた上海の町をこれからいよ〳〵訪問するのかと思ふと胸が高鳴つてくるのを覺えました。

埠頭には澤山の兵隊さんが或は働き、或は誰かを迎へにきたのか慌しげに目で乘客を追つて居ります。左の碧い空にはかねてから、聞いてゐたブロードウエイーマンションの二十七階建がくつきりとそびえ、埠頭には兵隊さんの中にまぢつて汚ない苦力が働いて居りますが、然し私の第一印象は力强い兵隊さんのカーキ色の服、懷かしい水兵さんのセーラーを見て何とも云へない力强い、懷かしい樣な氣持で御座居ました。

日本の兵隊さん

上陸して私共の小隊が町を進む間、兵隊さんが三々伍々うちつれて歩いて居られます。

私共は歩きながらどんなに力强く思つた事でございませう。多勢の兵隊さんはもとより、たつた一人の兵隊さんでも私共は自分達の目にその姿がある限り力强く賴もしく何の不安もなく歩く事が出來ます。そしてそれは一日〳〵と方々を御慰問し見學する度に一層强く感じられました。

曾つての激戰があつた北四川路は上海に居ります間、私共は幾度となく往復したのでございますが、そこには數しれぬ東洋平和の爲、護國の人柱となられた方々が永遠に眠つていらつしやいます。私はその生々しい墓標

を見るにつけて私共がその前を敬禮したゞけで通るのは勿體ない樣な氣がしてその尊い魂の前にいつまでもぬかづいてゐたい樣な氣が致しました。そして墓標の前の絶えまない、御線香の煙とお花、時にはおみかんや、お菓子を見ると日本の兵隊さんのやさしい心がしみ〴〵と感ぜられて自然に瞼のあつくなるのを禁じ得ませんでした。

又日本の兵隊さんはほんとうに偉いなあ、と感じたのは一日蘇州河クリークのかへり、高橋部隊におよりした時でございました。高橋部隊長は少年團に關係して居られたので涙を流して喜ばれ、我々をとても御不自由な地にもかゝはらず歡待して下さいましたが、次第に戰談に花が咲きさうで高橋部隊長は、一人の部下をおよびになりました。この兵隊さんは裸傳令で有名な岩田上等兵で、寒中のクリーク、然も敵前の彈雨の中を裸で泳ぎ渡つて、その重大な任務を全うした方ですが、高橋部隊長がその武勇傳を話してゐらつしやる間、部屋の隅に腰を下して、ほこる氣色もなく寧ろ恥かしさうにして居られましたが、高橋部隊長が何かその時のことを尋ねられても言葉少なに語られたのを聞いて、その命がけの武勇をも誇らぬ謙讓な態度に本當に日本の兵隊さんは偉いと內地に居てさういふお話を伺つた時よりも心深く感ぜられました。

上海慰問の中でやはり一等うれしかつたのは兵隊さんの喜ばれる姿でございます。私共は道を歩きながら道々御慰問したのでございますが、慰問文を受けとる時の嬉しさうな笑顏。その時の兵隊さんのその嬉しさうな樣子は一生忘れられぬ程深く心に刻まれて居ります。

戰の跡

戰跡をめぐつた中で一番印象の深かつたのは蘇州河クリークで御座います。こゝはまだその戰の跡も生々しい畑の中に敵の屍體が、二三百ころがつて居りましたが、その日の曇つた灰色の空の下に殆んど骸骨の樣になつた屍體がボロ屑の樣に打倒れてゐるのは目を掩ひたい樣な物凄い光景で御座いました。その中にはまだ男の子の屍體も御座いましたが、何も知らない小さな子供まで戰にまきこんだ無慈悲な支那を憎んでもあきたらない氣持とこの尊い日本の國に生れた誇りと喜びとが胸を打たずには居られませんでした。又はるか向ふでは犬が屍體を食べて居ります。戰に破れた國のみじめさも私はこの時、本當に視ることが出來たのでございます。

又大場鎭の堅固な陣地の一部も印象深いものでございました。三つのトーチカに濁流滿々たるクリークのうねり、よくも攻め落したものだと日本軍の强さに唯々感激する外は御座いません。竹藪の中の支那兵の洋傘、水筒、帽子、不發の手榴彈、小銃の彈、又は白骨等、その激戰を物語り、寒風の野に吹きまくられる柳の木もそゞろ哀れを感じさせました。

× ×

鋪裝道路を軍用トラックにゆられて、市政府へ着いたのは元旦の午後で御座いました。嘗つてはその豪華なる建築を以て誇つた市政府も今は見るも無慘なうつろとなつて僅かに柱や屋根にその面影を止めて居るにすぎません。中に入ると正面の華麗な廣間や食堂は、足の踏み場もない程本や硝子の破片が散亂し、こわれた硝子窓を通して日の光が暗い部屋になゝめに差込んで居ります。附近には砲彈の破片がちらばり孫文の銅像の破片が空しく殘つて、昔の夢ははかなく消え失せて居りました。

× ×

五日間のねとまりですつかりお友達になつた陸戰隊の方々の『萬歲!! さよなら!!』の聲を背に受けて思ひ出多き上海を出帆したのは、五日の午後でございました。行きとは反對に愛着をのこして船はボーツと汽笛を鳴らして埠頭をはなれました。松井閣下、長谷川閣下の溫顏が浮んでは消え、消えてはうかびます。

こゝに來て本當に皇軍の尊いお働きと御苦勞をまのあたり見ることが出來たと云ふことは何といふ幸な事でございませう。日本へ歸つたならば私は之等の事を出來得る限り少年少女にもお傳へして共に手をつなぎ、銃後の國民の一人として戰の庭の將士に對しても、しつかりしなければならぬ

と深く心にちかひました。そして松井、長谷川兩閣下の御言葉にも又御期待にもそふ事の出來る樣努力しようと決心致したので御座います。

私の感想

岡本千枝子

東洋平和のためならば
なんで命が惜しからう

と歌ふ皇軍の將兵さんを御慰問に上海へ! 私の心はどんなにおどつた事でせう。でも夏東京聯合少年團の女子部の合同野營に大島へ行つた時さへ船に酔つた私、あの波濤あれると云ふ玄海灘を越へて行く旅路、敗殘兵や便衣隊の爆彈騷ぎの續く上海、何んだかおそろしいやうな氣もしました。だが東洋平和のため、貴い人柱となられる人達の事を思へば、そんな氣持はぬぐひ去られてしまひます。

母校(東京市立忍ケ岡高等女學校)の全生徒から托された慰問文約八百通と、方々から贈られた慰問品、これを受けてくれる將兵さんはきつと、大喜びに喜んでくれることでせうと、樂しみに出發しました。

「彌榮」の聲も高く、多數の人々に見送られて、東京から長崎への永い間の汽車旅、その間に一行の仲間がだん〴〵ふえました。けれどもそれは皆男子の人達で、女子は東京驛から乘つた四人だけでした。

ラヂオやお話で聞いたり、新聞や、雜誌や、ニュース映畫で見たよりも現地を實際に見て、上海と云ふ所は、外國の船がゐたり、いろんな建物や租界などあつて、隨分戰のやりにくい所だと感じました。

そして陸軍や海軍の方々に、諸方を見せて頂いたり、その現場でお話を伺つて、事變の始め、僅な陸戰隊だけでよくも守り戰つたものだ。よくこんな所から敵前上陸が出來たものだ。クリークや、鐵條網、塹壕、トーチカとかためた頑强な敵陣をよく攻め破ることが出來たものだと、今更に皇軍の强いことをしみ〴〵と感じました。

「無敵皇軍萬歲」と心のうちで叫んだことは、數へ切れぬ程ありました。その强い皇軍の將兵さんを軍艦に、部隊に、飛行基地に、いろ〴〵の勤務先に、或は病院に御慰問すると、どこでも心から喜んで下さいました。そして至る所で歡迎して下さつて、あべこべに私達にお菓子や水菓子を御馳走して下さつた所もたくさんありました。

「日本の兵隊さんは强いが怖くはないよ」

と支那の子供達が我が將兵さんになじんでゐた所も見ました。全く皇軍の將兵さんは逆ふ敵軍以外には親切なよい小父さん達です。

上海戰場の街路、廣場、畑、クリークの堤等に數々ある我軍の名譽の戰死者の墓標に交じつて、支那軍無名勇士の墓標が立つてゐるのを見かけましたが、これは皆我軍の手によつて建てゝやつたのだと聞きました。敵の戰死者にまで大きな愛の手をさしのべてやるこの皇軍の溫情には心をうたれました。

蘇州河クリーク附近の敵軍全滅の跡の生々しさや、自分の國の町でありながら、住むべき所もなく、南市の避難民收容地帶にゴチヤ〴〵になつてゐる支那人達を見ますと、戰爭は勝たねばならぬと云ふことを、强く〴〵胸に刻みました。そして罪もない自分の國の人達をこんなに困らせたり、死なせたりしてまで正義日本に刃向ふ蔣介石と國民政府のやり方が憎くてたまりません。

この慰問旅行中心をうたれた事は餘りに澤山でありますが、その中で、わけて戰友の友情と上官の部下を愛すると云ふ二つには感激してゐます。

戰友の遺骨を抱いて敵陣の一番乘りをしたり、戰友の墓前に慰問袋の中のお菓子を供へたり、病院で「自分はお志だけで澤山ですから見舞品は兵の方へやつて下さい」と同じ傷いてゐる兵士の方を心配する士官、かう云ふことを聞くにつけ、見るにつけ、涙がこぼれました。よい士官、よい戰友その中で戰ふ皇軍の將兵さんは幸せです。そして强い筈だと思ひま

す。

戰地では慰問文が樂しみだと聞いて居りましたが、今度行つて見て、もう第一線でない上海では食糧品も日用品もどうやら事足りてゐるので、さう云ふものより、日本からの便りにどんなにあこがれてゐるかと云ふ事がよく判りました。私達の持つて行つた慰問文は兵隊さんが奪ひ合ひでした。母校の名と學年と書いた方の名前がありましたので、この頃は毎日多數の御返事が學校へまいります。ほんとにこんなに喜んで戴けるとは思つて居りませんでしたのに。

次にあちらで、つらかつたことは、生水を飲むことを嚴禁されたことです。一杯の水も飲めませんでした。しかしおかげで病氣にはなりません。今となれば有難いことであります。

× ×

皆仲良く、樂しく、無事に慰問と見學の旅を終へて、うれしう御座いました。この旅行は私の一生のよい思出であります。

一杯の水

松尾房子

今上海に於ける滯在一週間の慰問行を省みれば、實に無量の感慨に打たれるのでございます。出征して居る親戚の人からのお便りを見て、まるで嘘の樣な氣しか致しませんでした事どもが、嚴肅と言はうか、悲壯と言はうか、一度び目のあたりその皇軍奮戰の跡を訪れて見ますと餘りにも思ひがけぬ現實を前にたゞ〳〵頭の下る思ひでございました。

今まではたゞ支那を憎く憎く思ひ、强い强い皇軍の力で速く支那が全滅してしまへばよいと思つて居りましたけれど、あの有名な蘇州河の戰場に立つて慘澹たる光景を目擊した時は何時の間にか其の憎しみが憐みの心に變つて居りました。

あのむごたらしい支那兵の死體、何百とも知れぬあの人々にも故郷にはそれ〴〵いとしい親も子もありませう。誤れる統治者の許に誤れる愛國の念にかられ、尊い命を犧牲にして死んで行つた人々よ。あの人々が否支那全土の人々が、眞の心の眼を開いて、一段と高い所から誠の世界を眺め、たゞ口先にのみ「平等だ！ 自由だ！ 平和だ！」と論じ、しかも事實は「有色人種」の何のと優劣の區別をつけるやうな國の人々に對して、もつと堂々とした態度で接し、我と共に東洋の平和否世界の平和の確立の爲に盡して呉れたなら、我々日本人はどんなにか感謝することでありませう。此處ばかりではない。大陸の北に南にわたつて敵味方の尊い犧牲が拂はれてゐることは幾十萬でありませうか。

しかしこれによつて、やがて支那が迷夢から目覺め、わが日本と互ひに固く握手する時が來ることが出來るならば、その時こそ日支兩國民の幸福は全く計りしれないものがありませう。今や日本は明るい希望を目指し、確固たる信念の下に正義の劍を取りました。

一度、起つた上は如何なることがあらうとも、決して敗けてはなりません。今回各所を慰問し、見學しての、見聞には何一つ心の糧とならないものはありませんでした。

しかも始めから終りまで、强く私共の胸に響いたのは實にこの思ひでした。

出征將士の御苦勞は、内地ではとても想像だも及びません。

あの妙な臭ひのするお湯。

それすら滿足には飲めることがありません。又あの内地からの便りをどんなに喜んで下さることだつたか。

餘りどこへ行つても大事に迎へて下さるので勿體ないやうでございました。

非戰鬪員の働きも眞實に涙ぐましいものがありました。

私どもがかうして今無事に内地に歸り何不自由なく暮して居ります事を思へば只々有難くて、一杯の水も粗末には出來ない氣が致します。

我々銃後を護る者達はもつともつと緊張しなくては不可ないのではないでせうか。

そして戰地に働いて居られる將士へ出來る限りの慰問を充分に徹底させるべきではないかと思ひます。

永久の記念に

成川三保子

昭和十二年十二月二十九日、上海皇軍慰問の途についてより、早一ケ月の月日も過ぎ去りました。思へばたゞ一週間の慰問旅行ではありましたが、感激の多い、爲になる旅でした。

ひとり思ふにつけあの上海の感激が、樣々の背景を負うて思ひ出され、今になつて實に感慨無量です。それにもう一生忘れられない永久の記念になるのだと思ひますと、本當によかつたと感ずると共に、小國民として兵隊さん方をお慰めする事が出來たといふ事は、兵隊さんのお働きの萬分の一にも當るお國への御奉公でもしたやうに思はれて、ひとり喜んでをります。

私達はこれからも尙一層健兒として、學生としてのお國への御奉公にせいを出し、其の分を全うしたいと思ひます。

大日本少年團聯盟 支那事變 上海方面皇軍慰問團名簿

（昭和十二年十二月現在）

幹部

團長	大日本少年團聯盟理事	陸軍少將	酒井幾造
隊長	大日本少年團聯盟本部員	大日本東京海洋少年團理事	田村喜一郎
團附	東京聯合少年團本部員	法大講師	若宮正
隊附	名古屋市東邦健兒團員		小西金之助

團員

宮城	梅檀健兒團	伊藤秀光	（十六歳）	梅檀中學校 二年	仙臺市荒巻 梅檀中學校寄宿舍
栃木	矢板少年義勇團	高柳正介	（十七歳）	宇都宮商業 五年	栃木縣鹽谷郡矢板町大字矢板一二二九
東京	津久戸少年團	川村次郎	（十八歳）	東京府立工藝 五年	東京市牛込區神樂町三ノ二 加藤方
				東京市世田谷區若林町五四三	
				東京市世田谷區深澤町四ノ七〇	
				東京市京橋區西八丁堀四ノ八	
				名古屋市西區堀端町三六	

東京	神龍少年團	林　興壽郎	（十七歲）	警視廳通信手	三年	東京市神田區鎌倉町一ノ一
神奈川	美與志少年團	田村　稔	（十六歲）	横濱商業	三年	横濱市中區三吉町四ノ三〇
靜岡	靜岡少年團	小長井秀雄	（十四歲）	靜岡男子高等小學	二年	靜岡市三番町八九
靜岡	清水市少年團	島田太郎	（十七歲）	靜岡中學	五年	清水市辻町三四九
愛知	三商健兒團	古澤啓三	（十七歲）	名古屋第三商業	五年	名古屋市昭和區丸屋町三ノ一六
京都	大谷金星健兒團	井辻憲一	（十四歲）	京都第一中學	一年	京都上京區今出川通寺町西入大原口町二一四
大阪	金光教泉尾健兒團	奥出重吉	（十四歲）	浪速中學	一年	大阪市大正區北泉尾町一ノ一七三
大阪	小熊の群健兒團	山下　健	（十五歲）	日新商業	三年	大阪市東成區鶴見町二七三
兵庫	西宮義勇少年團	今西福藏	（十六歲）	關西工業	四年	西宮市滿地谷町二八
岡山	金光教靈地健兒團	金光國勢	（十八歲）	金光中學	五年	岡山縣淺口郡金光町大字大谷三二三
廣島	廣島報國少年團	唐須晴男	（十六歲）	廣島第一中學	三年	廣島市段原末廣町一二六
山口	山口少年團	中野　馨	（十四歲）	山口中學	一年	山口市中河原二一
朝鮮	仁川中央健兒團	田中一正	（十五歲）	仁川公立中學	二年	仁川府山手町三ノ三
朝鮮	南山健兒團	國分正二	（十八歲）	印刷業		京城府黃金町三ノ三四四
臺灣	高雄市壽少年團	吉田盛次	（十七歲）	高雄州立高雄中學	四年	高雄市壽町二七

海洋健兒

東京	大日本東京海洋少年團	日暮瑞穗	（十六歲）	東京府立第八中學	三年	東京市大森區大森二ノ二五
神奈川	大日本横須賀海洋少年團	加藤兼雄	（十五歲）	横須賀市立實業	二年	横須賀市中里町一七〇
廣島	吳海國少年團	三崎千年	（十五歲）	吳市長迫尋高	二年	吳市鹿田町二九一
長崎	大日本長崎海洋少年團	道田信一郎	（十四歲）	長崎中學	一年	長崎市下西山町五二

女子健兒

東京	東京中央青年健兒團女子部	三島謹子	（十五歲）	女子學習院後期	二年	東京市澁谷區千駄ヶ谷四ノ七七五
東京	東京中央青年健兒團女子部	岡本千枝子	（十五歲）	忍ヶ岡高女	二年	東京市大森區入新井四ノ八〇
神奈川	横須賀少年少女團	松尾房子	（十五歲）	横須賀高女	二年	横須賀市汐入町五八〇
神奈川	横須賀少年少女團	成川三保子	（十四歲）	横須賀高女	一年	横須賀市汐留町四〇

昭和十三年四月十日納本
昭和十三年四月十五日發行　【非賣品】

發行兼編著者　東京市京橋區西八丁堀四ノ八　若宮　正

印刷者　東京市京橋區西八丁堀四ノ四　白橋龍夫　電話京橋(56)六八八二番

印刷所　白橋印刷所

79.
143

終